

人文会 NEWS

2015.4

no.

120

—書店現場から—

ちくさ正文館という本屋……………

古田一晴 1

—15分で読む戦後七〇年—

体験的読書案内——世界の戦後七〇年に際して……………

細見和之 6

—図書館レポート—

図書館にとって専門書とはなにか？——知の再生産を維持・拡大するために……………

パネルディスカッション ◆ 加藤信哉／田村俊作／江草貞治 19

—編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑤—

晶文社の「まるごとヨシモト」……………

間宮幹彦 29

—研修会、イベント報告—

年末年始は本の街 神保町で人文書……………

副田陸児 36

人文会ニュース目次再録（101号～120号）

<http://www.jinbunkai.com>

[新版]日本の民話 (全79巻)

装いも新たに再刊しました!
(4月より毎月3冊刊行)

- 1 信濃の民話 瀬川拓男・松谷みよ子 編 2200円
- 2 岩手の民話 深沢紅子・佐々木望 編 2000円
- 3 越後の民話 第一集 水澤謙一 編 2200円

ダーチャと日本の強制収容所

望月紀子

作家・詩人・劇作家D・マライエーニ。一家で来日、少女は名古屋の強制収容所でのあまりにも苛酷な飢えや寒さを経験する。時代を駆け抜けてきた作家の《もうひとつの物語》。 2200円

大城弘明写真集 鎮魂の地図

沖繩戦・一家全滅の屋敷跡を訪ねて

戦後70年をまえに、沖繩戦の悲惨な記憶の一侧面を記録としてとどめるべく、沖繩報道写真界の実力者が一貫して撮りつけてきた糸満市の「チネードーリ」の屋敷跡の写真集。 2800円



未来社

〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
TEL03-3814-5521 FAX03-3814596
<http://www.miraisha.co.jp/> ※表示は税別

福島に農林漁業をとり戻す

濱田武士・小山良太／早尻正宏 漁・農・林業の経済学者が、科学的知見に立つて原発災害からの復興に道筋を示す。 3000円

相互扶助の経済

無尽講・報徳の民衆思想史

ナジタ 徳川時代、飢饉に喘ぐ庶民が共済事業を推進。現代につながるテーマを詳述。五十嵐暁郎監訳 福井昌子訳 5800円

近代デザイン的美学

高安啓介 デザインにおいて「モダン」とは何をあらわすのか? 日本における事例・解釈をとりあげ再検討する。 3000円

世界宗教の発明

増澤知子 十九世紀の言語学と宗教学によるアーリア語と仏教の発見から、西洋の自己形成を探る。 秋山・中村訳 6000円

みすず書房 (税別)

東京本郷 5-32-21 <http://www.msuz.co.jp>

シリーズ
近代美術のゆくえ

社会とつながる
美術史学

近現代のアカデミズムとメディア・娯楽

太田智己著 美術全集・ラジオ番組 大衆小説・古美術 観光・デパート展覧会:。メディアと娯楽を通して美術と社会のつながりを探る。 A5判/42000円

明治・大正の広告メディア

熊倉一紗著 〈正月用引札〉が語るもの A5判/2400円
明治・大正期に配布された極彩色の印刷物、正月用引札。佛くも消えていったメディアの全貌に迫る。 図版多数。

吉川弘文館 東京都文京区本郷 7-2
TEL03-3813-9151 / 税別

大河ドラマ「花燃ゆ」時代考証者による道案内

松陰の歩いた道

海原 徹著 ●旅の記念碑を訪ねて 松陰ゆかりの記念碑、史跡をすべて紹介。そこから松陰の行動と思索を辿り、また、強い人気のお宝を探る。 25000円

知って役立つ民俗学

民俗学の視点から日本の暮らしを捉え直す 福田アジオ責任編集 ●現代社会への40の身近な疑問から出発し、生活や社会に繋がる民俗学の世界へと誘う。 28000円

ミネルヴァ日本評選選

辰野金吾 美術は建築に応用されざるべからず

河上眞理/清水重敦著 東京駅をデザインした「建築界の父」の知られざる実像。 2500円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税別/宅配可

ちくさ正文館という本屋

古田 一晴(ちくさ正文館書店店長)

当店は一九六二年の創業である。私は一九七四年アルバイトで入社し、一九七八年に正式入社となる。その後約二〇年は、売り場拡張・出店に明け暮れる日々。

一九八二年、創立二〇周年記念「歴史書1万点ブックフェア」を開催。あわせて、記念講演会を「新しい歴史への旅」と題して、阿部謹也、網野善彦両先生をお招きし村松洋裁学院ホールで開催。これを皮切りに、一九八八年「歴史書懇話会二〇周年記念フェア」(以上は人文会と共催)、一九九四年「歴史書懇話会二六周年、国語・国文出版会一五周年記念フェア」をそれぞれ成功させる。これら三つの会の強力なバックアップなしには成功しえない大きな試みであった。それぞれの版元の先輩方には現在もなお教えられることばかりである。

それなりの達成感を体験する一方、当時は、創業者谷口暢宏の人文書、文学書に対する情熱が人一倍強力であった。私たちスタッフは、それに引張られながらも、自発性を教え込まれる。現在とは違ってメガストアが皆無の時代、注目度は今とは比較にならなかったばかりか、フェアの結果は規模に見合う手ごたえを実感した。時代は追い風であり、創業者谷口

のこれまでの経営姿勢の成果が実った、幸せな時代であった。

現在の規模に落ち着いて二〇年ほどになる。しかし、核になるジャンルは変えていない。むしろ以前より棚の手入れに時間をさけるようになる。人文書、文芸書、芸術書の見直しは最小限にとどめ、逆に当店にとっての不得意ジャンルを大胆に切り離す。幸い想像したほどの苦情はでなかった。しかし、市内中心部への大型出店が続いた時期だったから、不安材料がなくなったわけではなかった。専門書を置く書店が増え、市内の専門書在庫がいつきに二倍近くになったのだから、既存店で人文書にウェイトを置く店への影響は避けられない。これまで未体験だった本屋環境が出来上がり、本屋シーンが活性化するかに見えたが、そうはならず、人文書店が定着する難しさを思い知らされる。そんな中で当時の各書店の担当者との交流を重ね、とてつもない刺激を受ける。充実した意見交換も増えて、棚を競い合う気力が生まれる。

そうして、マイナーチェンジをしながら、創業以来のポリシーを守る方法を模索する。またそれが大きな課題となる。あわせて当店の初期からの常連のお客様、先生方がそろって高齢になられた。私を鍛えてくださり、生涯本屋通いをおやめにならなかった方々ばかりである。私の勝手な理想のお客様はたとえば、高校、大学時代にきっかけをつかみ、一生お付き合いができるような人である。そんな本好きにはたまらない品揃えを目指したい。「守り」より「前向き」に考えるようになる。それもこれもお客様に自然に教えられていたと気づく。幸運にも私は、本店の人文書、文芸書担当を一度も離れたことがない。若年のお客様、友人

も本を介しての長いお付き合いが続くおかげで親密度がいやましてゆく。そうしたお客様からはたびたび、「いつも(三六五日)いるね!」と言われる。また、同時代若年の友人が様々なジャンルの中心で活躍している。キャリアと広い人脈を持っている友人の提案・協力では、他では思いつかないブックフェア、イベントが可能になる。詳細は省くが、現在も何本も控えている。

今年二月三日、友人の高山富士子さんから「甲斐扶佐義をお連れしてそちらに伺う」と連絡があった。この一月一六日火事で全焼した京都「ほんやら洞」の店主にして写真家である一九七九年、片桐ユズル他編『ほんやら洞の詩人たち——自前の文化を求めて』(晶文社)が出版されている。高山の仲介で名古屋の風媒社へ出版の打ち合わせのための来社であった。書名は『ほんやら洞日乗』で、当店へは出版記念写真展の依頼と下見を兼ねている。イベントに使用していた二階には、一月中旬から古書店の「シマウマ書房」が出店。店主の鈴木創さんは、風媒社より『名古屋の古書店』を出版している。こんな風につながっていく。その二階のまだ空いているスペースを展示会場にしようかと考える。実現に向けて話を進める。会期は五月の連休前後を目安とする。高山とは「センチメンタルシテイロマンス」の事務所のでフォークシンガーいとうたかお(『小さな唄に手を引かれ』(ビレッジプレス)の著者)のマネージャの頃よりの友人。彼も高校時代から「ほんやら洞」に日参していたという。

その日、甲斐さんから頂いた『on reading』(光村推古書院)には「よむ」をモチーフにして、モノクロで市井の人々の豊かで懐かしい写真に、鶴見俊輔などが登場している。その続編の

『ツー・ショット』(同)では、磨赤児についての思いがけぬ発見をみつけて楽しませる。

高山と私のコラボでは、二〇〇九年の「BOOK MARK NAGOYA」の当店の企画が初。『記憶を汲みあげる——岡部昌生の世界』を高山が持ちかける。岡部氏は北海道在住、第五二回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館代表展示作家。フロッタージュ作品の足跡を、映像、資料の展示、作品集『岡部昌生、わたしたちの過去に、未来はあるか』港千尋編(東京大学出版会)、図録の販売を行う。同じく高山とは二〇一二年に、店の二階スペース全体を使用して、「米国のいまから、日本の明日を考える」と題し、マイケル・ムーア監督『シッコ』の上映、岩上安身著『百人百話』(三一書房)の刊行記念講演会と、ゲストにタレントのフィフィとのクロストークカフェを企画する。

二階をイベントスペースに活用するきっかけは、吉増剛造氏の『裸のメモ』(書肆山田)の刊行記念。吉増氏の映像作品のうち、芭蕉の松島以北の『奥の細道』ゆかり作品をビデオ上映。旧知で企画を持ってこられ、新著『江戸尾張文人交流録』(ゆまに書房)ともからめ、お二人のトークイベントも行う。以来さまざまイベントに使用することとなった。

二月一七日、雑誌「棲」(自由空間)の兼松春実さんよりイベントの相談を受ける。昨年七月、誠文堂新光社より出版された、大坊勝次著『大坊珈琲店』の次回作『大坊珈琲の時間』(自由空間)を進行する中で、二階スペースで実際に珈琲を淹れながら、刊行イベントをしたいとの提案を受ける。本書の対話者(瀬戸市在住の)キムホノ氏が「大坊珈琲店」の常連で、

前著の刊行記念トークイベント(二〇一四年九月六日「B&B」)にてはじめて二人の対話を実現した。その最初の本は私家版で、改訂版を誠文堂新光社が市販したが、今回の本は直扱いのみである。前著の造本もすばらしいが、今回の木村一成(写真)安藤一輝(装丁)の両氏、さらには兼松さんの内容に相応しい編集で、入魂の出来栄である。「本」を単にデータであると勘違いしている人には、是非手にとっていただきたい。

雑誌「棲」の三人の女性編集者は、当店の常連(ファン)さんだったらしい。その雑誌創刊のころ何度も話す機会があったらしく、こちらの思いとは違って、本の問い合わせに怖い思いをさせていたらしい。「そんな本も知らないの?」と言われるままその対応を楽しんでいた節がある。今思えば冷や汗もので少しは反省したが、それがきっかけとなって親しくなれた。さらに驚いたのは、学年こそ違え、全員が同じ小学校の出身であった。

イベントは五月の下旬に予定している。



筆者 近影

杉本秀太郎・甲斐扶佐義著『夢の抜け口』(青草書房)
の杉本氏があとがきに書いている。

「想像の環あるいは連想のカラクリを解こうとする振舞そのものが、書くという振舞になったのだから、事が起きるのは、きっかけのその先である。」こんな空想世界を実現できるのは書店の空間をおいてほかあるまい。

古田 一晴(ふるた かずはる)

体験的読書案内——世界の戦後七〇年に際して

細見 和之（大阪府立大学教授）

はじめに

戦後を一九四五年を起点に数えるなら、確かに今年で七〇年である。私は一九六二年の生まれなので、戦後一七年にして誕生し、二一世紀への移行をふくんで、いままで生きてきたことになる。それでも、一九七〇年前後ぐらいまでは、ほとんど実感として捉えることが難しい。もっといえば一九八〇年の大学入学以降が私なりにさまざまな思想に自覚的に接してきた時間となる。それでも、たとえば現在のの大学一年生の標準的な誕生日が一九九六年前後であることを考えれば、私なりに自覚的に思想に接してきた時間にこだわってもそれなりに意味

があるかと思えてくる。

以下、はなはだ勝手ながら、客観的な紹介よりもきわめて主観的ないし体験的な紹介となつてゐることをあらかじめお断りしておく。

一九八〇年代初頭、マルクス再生か葬送か

さきに記したとおり、私が大学に入学したのは一九八〇年。まだ、マルクス主義の影響力が大きかった。とはいえ、すでに「マルクス葬送派」と呼ばれる潮流ははっきりと登場していて、いくつかの雑誌ではそういう特集が組まれていた。たとえば、一九七〇年代に論壇月刊誌として大きな位置を占めていた「流動」（流動出

版)一九八一年二月号の特集は「マルクス——葬送か再生か」で、それぞれ、竹内芳郎といいだもによる「近代世界とマルクス主義」、岡庭昇と笠井潔による「戦後市民社会とマルクス葬送」という二本の対談が収録されている。ただし、このなかではっきりと「葬送派」と目されていたのは、笠井潔だけである。

それに対して、「思想」(岩波書店)一九八三年三月号で特集「マルクスと現代」が組まれた際、巻末に「マルクス——再生か葬送か」という、「流動」の特集を反復するような「討論」が組み込まれていて、こちらの討論者は、竹内芳郎、いいだも、小阪修平、戸田徹の四名であり、小阪と戸田は自他ともに認める「葬送派」という位置にあった。もはや「思想」という雑誌においてさえも「マルクス葬送派」は無視しえない潮流となっていたのだ。

一九八三年はカール・マルクス没後百年という区切りでもあって、「現代思想」(青土社)も同じ一九八三年三月号で「増頁特集Ⅱマルクスと現代思想」を組んでいる。こちらでは「共同討議1〈戦後マルクス主義哲学の証言〉」と題して、大井正、船山信一、廣松渉の討議、「共

同討議2〈マルクス・貨幣・言語〉」と題して、柄谷行人、岩井克人、浅田彰の討議が収録されている。こちらは、戦前からのマルクス研究の流れと、ポスト・モダンの潮流を受けたマルクスの問いなおしという、二本の柱となっている。また、同時にこの特集では、フランソワ・リオタールの「ポスト・モダンの条件」、アントニオ・ネグリの「支配とサボタージュ」という論考の翻訳が掲載されていることも重要だ。どちらも、その後盛んに論じられる思想家である。

要するに、私が学生時代を過ごした一九八〇年代初頭は、古典的なマルクスの思想がはっきりと疑われるとともに、ポスト・モダンの思想が台頭するなど、すくなくとも日本ではきわめて流動的な状況でありながら、いままなおマルクスの思想的権威が一方で存在していた、そのような時代だった。私自身は、マルクス葬送派はもとより、ポスト・モダンの台頭にも、違和と反発ばかりを感じていた。

そのなかで、大月書店版の『マルクスⅡエンゲルス全集』の継続的刊行は、やはり世界的にも特筆すべきことだと思ふ。一九五九年の刊行開始から、一九七五年まで

に本文巻の全四五冊を出版し、さらに一九九一年にかけて補巻と別巻を刊行し、じつに三二年の歳月を費やして全五三冊を出版・完結させるという大仕事だった。累計部数は一四三万部に達したといわれるが、そもそも日本の出版業界における一大事業と呼ばれてしかるべきだろう。どれだけの間がどれだけのエネルギをそこに注ぎ込んだかと思うと、いささか茫然としてしまうほどだ。『マルクス・エンゲルス全集』の翻訳事業を中心で担った岡崎次郎は、八〇歳となった一九八四年に、家財を整理して夫人とともに死出の旅に出たとされ、その後の行方はいまにいたるまで知られないままである。それは、戦後日本、さらには戦後世界そのものにおける、マルクスの思想の行く末をも暗示しているような気がしてならない。

歴史学の大家エリック・ホブズボームも、世界システム論で知られるイマニュエル・ウォーラー斯坦インも、基本的にマルクス主義者であるという事実は、そう簡単に忘れられてはならない。特権視されたマルクスではなく、さまざまな思想家のなかのひとりとしてのマルクスがもう一度問われる必要がある。

フランスの戦後思想の活況

同時に、戦後の時期は、フランスの現代思想が活況を呈していた時代だった。日本で私がそれらの思想に実際に接したのはやはり一九八〇年以降だが、ジャン・ポール・サルトルの実存主義とクロード・レヴィ・ストロースの構造主義、ミシェル・フーコー、ジャック・デリダらのポスト構造主義がほぼ同時期に目に飛び込んでくるような状態で、文字どおり眩暈のするような印象があった。

戦後のフランスにおけるサルトルの存在感には甚大なものがあって、日本では人文書院から刊行されていた『サルトル全集』は一九八〇年当てもまだ熱心に読まれていた。もはや『存在と無』ではなくて新たなマルクス主義の著作として構想された『弁証法的理性批判』に関心の中心は移っていたが、みずず書房を中心に刊行されていたモーリス・メルロー・ポンティの『知覚の現象学』をはじめとした一連の著作とともに、サルトルとメルロー・ポンティは一種の双壁をなしていて、哲学好き

のあいだでは、フッサールの現象学の本格的な深化としてメルロー・ポンティの方が次第に人気を占めていった。それは、文学好きのあいだで、サルトルに対してアルベール・カミュの評価が高まるのと平行していた印象があった。逆にいうと、それまでは、メルロー・ポンティに対しても、カミュに対しても、サルトルが圧倒的に優位にあったのである。

まだマルクスへの関心を保持しながら、サルトルかメルロー・ポンティかといった議論が交わされている一方で、『狂気の歴史』以来、『言葉と物』、『監獄の誕生』などのフーコーの大きな著作が一九七〇年代後半から一九八〇年代にかけて、つぎつぎと翻訳されていた。サルトルはフーコーの『言葉と物』を、ブルジョワジーがマルクスに置いた最後の障害物、といった趣旨の批判（評価）を述べていたし、フーコー自身、マルクスは一九世紀の思想の認識枠組みにすっぽり収まると、明確にマルクス批判を提示していた。しかし、そういうフーコーの思想の持つ優れた政治性に、社会批判といえればマルクスという雰囲気強いなか、なかなか目が向けられないところもあった。しかもその時点で、フーコー自身の生

涯は早すぎる晩年に差しかかっていて、フーコーの最後の著作となった『性の歴史』三部作の第一部『知への意志』が日本で翻訳されたのは、一九八四年のフーコーの急死からさらに二年後のことだった。以降、日本でフーコーに対する関心が『性の歴史』に偏するようになったのは、なぜだろうか。その間に、『狂気の歴史』や『監獄の誕生』などの近代批判が一種の常識と化してしまっただからだろうか。

そのフーコーと文字どおり踵を接するようにして、デリダの著作も翻訳されていた。とくに初期の『グラマトロジーについて』や『エクリチュールと差異』はいち早く熱心に翻訳・紹介されていたが、デリダの「現前の形而上学批判」、「脱構築」といった中心思想が一般に理解されていたのは、一九八〇年代後半以降、さらには一九九〇年代以降といえるのではないか。性的な語彙をちりばめたデリダの挑発的な語りに接して、当初は眉をひそめるような態度も見られたのである。後半生のデリダが、自分の出自と重ねながら、世界の状況への批判を明瞭に語りはじめたことも、デリダの思想に対する真摯な理解をもたらしたといえる。私自身「脱構築」という

発想に馴染んでいったのも、一九九〇年代になってからだった。

一方、一見政治からは縁遠く思われるエマニュエル・レヴィナスに対する関心も、一九九〇年代以降、高まっていた。現象学を出発点として、マルティン・ハイデガーに深く影響を受けながら、ハイデガー批判としても綴られたレヴィナスの大著『全体性と無限』や『存在の彼方へ』に見られる「他者」の思想は、ホロコーストを経た戦後世界の「倫理」として、強く受けとめられて現在に至っている。これも一九九〇年代以降のユダヤ思想への関心とレヴィナス受容は重なっていたといえる。

その他、フロイトの思想を独自に展開させたジャック・ラカンの『エクリ』、「認識論的切断」「徴候的読解」など、マルクス研究に認識論的な視点を持ち込んだルイ・アルチュセールの『マルクスのために』、『資本論を読む』、さらには「作者の死」を唱えたロラン・バルトの一連の仕事、フェリックス・ガタリとの共著『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』でも知られるジル・ドゥルーズの、じつに広範な哲学史理解に裏打ちされた仕事など、フランスの戦後思想の展開は、カントか

らヘーゲルに至る、かつてのドイツ観念論に匹敵するような豊穡さをひめている。

その際、フーコーやデリダがニーチェやハイデガーといった先行世代のドイツの思想から強く影響を受けていることも、興味深いところだ。総じて、戦後のドイツにおいて、ニーチェ、ハイデガーの思想に対してはナチズムという過去との関わりで警戒心抜きに継承しにくいところがあったのと比べて、戦後のフランスにおいては、ニーチェやハイデガーがナチズムと親和性を持っていたことは自明の前提として、かえって魅力的な敵国の思想として受容されたという側面があったのである。

ドイツの戦後思想

とはいえ、ドイツの戦後において、ハイデガーの存在を抜きにすることはできない。『存在と時間』が未完におわったあと、ハイデガーは戦中にはじめていたニーチェ講義やヘルダーリン講義を公刊するとともに、技術論、言語論などで独自のスタイルを築き上げていった。繰り返しナチス時代の態度を問われつつも、日本で

も『存在と時間』を中心にハイデガーは熱心に読まれてきた。そういうハイデガーに対して、戦後ドイツにおいてはつきりと批判的なスタンスをとり続けたのが、マックス・ホルクハイマー、テオドーア・アドルノに代表されるフランクフルト学派のひとつだった。とりわけアドルノは戦後のハイデガー人気に冷や水を浴びせるような批判を呈しつづけた。

私が大学に入学した一九八〇年の時点では、フランクフルト学派についてはヘルベルト・マルクーゼの著作とユルゲン・ハーバーマスの著作、フランクフルト学派には必ずしも数えられていなかったヴァルター・ベンヤミンの著作が中心に紹介されていた。そして、いずれも、マルクス主義との強い親和性のもとで理解されていた。一部のひとびとにとってフランクフルト学派は、新左翼の理論的支柱であるがゆえに尊く、また他のひとびとにとっては、それゆえにこそ悪罵の対象だった。いまでは、ポスト・モダンの先駆者のような位置をあたえられているベンヤミンでさえも、一九八〇年前後までは、「戦闘的マルクス主義者」として理解されていたのだ。

ただし、そういう理解は日本だけのものではなく、ド

イツにおいても同様だった。一九四七年にアムステルダムで刊行されたホルクハイマーとアドルノの記念碑的な共著『啓蒙の弁証法』が日本で翻訳されたのはようやく一九九〇年になってのことだったが、同書はドイツでも長らく幻の書と呼ばれていた。ドイツにおいても、学生運動が高揚する一九六〇年代後半、理論的な脚光をあびていたのはマルクーゼだった。広告産業がひとつの生活の隅々にまで浸透し、どのような批判の余地もあたえないかの資本主義社会の状況に対して、マルクーゼは「大いなる拒絶」を呼びかけた。しかし、『啓蒙の弁証法』はもとより、ベンヤミンの難解な著作をきちんと読み解いてみれば、マルクーゼの思想と重なる部分はわずかである。一九八〇年代後半には、ベンヤミン理解は、ドイツにおいても日本においても、マルクス主義よりも特異な言語思想を軸にする方向へと転換してゆく。それを象徴的に示しているのが、一九九五年からはじまった、ちくま学芸文庫での『ベンヤミン・コレクション』の刊行だった。

同時に、一九八〇年代には、『希望の原理』をはじめとしたエルンスト・ブロックホの名著の翻訳も進められた。

ジョルジ・ルカーチの盟友でありながら、ルカーチよりも遙かに広範な文化領域に関心を抱きつつ、マルクス主義者として生涯を送ったプロッホは、ベンヤミン、アドルノにも深い影響をあたえた。亡命の途上で自死したベンヤミンを除いて、これらの思想家はみんなナチス時代の亡命から帰還して活躍した。思想にとつて亡命とはなにかという大きな問いもそこには控えている。

フランクフルト学派の先行世代がことごとくユダヤ系だったのに対して、少年時代にはヒトラー・ユーゲンツに組み込まれていたのがハーバーマスである。ハーバーマスはホルクハイマー、アドルノから学びながら、彼らへの批判も組み込む形で大著『コミュニケーション的行為の理論』を一九八一年に刊行した。ドイツの戦後思想の流れのなかで、やはりこの本の出版はひとつの画期となった。ハーバーマスはそこで、マックス・ウェーバーからルカーチを経てアドルノに至る合理化論を再構成して、目的を志向する合理的行為から了解を志向するコミュニケーション的行為へのパラダイム・チェンジを描いた。以来、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論は、その後のさまざまな思想を導くひとつの柱

となった。

ハーバーマスはまた、優れた論争家としても知られる。学問的なものでは、一九七〇年代から継続された社会システム論の代表ニクラス・ルーマンとの論争が重要である。この論争をも糧としながら、ハーバーマスはアメリカ合衆国のタルコット・パーソンズのシステム論を『コミュニケーション的行為の理論』の中心部に持ち込んだ。また、一九八〇年代後半の「歴史家論争」では、ナチズムの過去を軽減しようとするドイツの歴史家の動きに対して鋭い警告を発した。また、ハーバーマスがフランスのポスト構造主義の思想を批判する前後、フォーコーからの共同討議の呼びかけがなされたことも忘れてはならない。さらにフランスの思想家との関連でいうと、二〇〇三年には、アメリカ合衆国を中心とした多国籍軍によるイラクへの空爆を受けて、その空爆を批判するとともに、ヨーロッパの再生をもとめる声明が、ハーバーマスとデリダの共同署名のもとで発せられた。

現在、フランクフルトの社会研究所の所長としてフランクフルト学派第三世代の中心に位置するアクセル・ホネットは、ハーバーマスに学びつつも、ハーバーマスの

コミュニケーション的行為の根底にあるものとしての承認関係にあらためて焦点をおいて、「承認をめぐる闘争」を軸とした社会哲学を展開している。

英語圏での戦後思想の展開

アメリカ合衆国の戦後思想のなかで、ヨーロッパからの亡命者が占めた位置は重要である。たとえば、初期のフランクフルト学派の重要なメンバーのひとりだったエーリヒ・フロムは、ナチスに追われて合衆国へわたったのち、『自由からの逃走』で世界的に知られるようになる。その後もマルクスの資本主義批判とフロイトの精神分析を統合した独自の社会心理学の立場から、『人間における自由』、『精神分析と宗教』、『正気の社会』、『愛すること』など、多くの著作を刊行していった。メキシコへ移住して、イヴァン・イリイチと出会ったことも重要であるし、鈴木大拙の禅の思想を精神分析と統合しようと試みたことも忘れられてはならない。いまから振り返ると、マッカーシズムによる反共思想が吹き荒れた一九五〇年代の合衆国で、マルクス主義者を公言す

るフロムの思想が受け入れられたことは意外でもある。

一方、同じくドイツからアメリカ合衆国にわたったハインリッヒ・ラーゼンバウムは、『全体主義の起原』によって、優れた政治学者として認められることになる。いまでは「ファシズム」や「全体主義」という概念自体を学問的には大雑把なものとして忌避する傾向があるが、ナチズムとスターリニズムを全体主義としていち早く批判したラーゼンバウムの思想には、現在の視点からしてむしろ慧眼が認められるべきだろう。その後もラーゼンバウムは『人間の条件』など優れた著作を刊行するが、エルサルバドルのアイヒマン裁判にもとづく『エルサルバドルのアイヒマン』の出版によって彼女は、全世界のユダヤ人を敵にまわしたといわれるほどの、批判の嵐にさらされることになる。これをめぐっては、ラーゼンバウムを主人公とする映画の公開、ラーゼンバウムとシオニズムの関係など、いまでも熱い議論が続いている。

生前のラーゼンバウムは共同体や国家の問題を第一義とする保守的な思想家と見なされる傾向もあったが、一九九〇年前後の社会主義圏の崩壊によって、ラーゼンバウム受容は大きく前進することになった。いまではラーゼン

ントはラディカル・デモクラシーの理論的支柱のような位置をあたえられている。アーレントは、時代の文脈によって思想家のイメージがどれだけ異なってくるかを、典型的に示している。

このようなヨーロッパから合衆国への亡命知識人の移動がもたらした意味は、スチュアート・ヒューズ『大変貌——社会思想の大移動』が詳細に描いている。アドルノが中心的な役割を果たした共同研究『権威主義的パソナリティ』ひとつを取ってみても、それは、ヨーロッパで培われてきた社会理論と合衆国で積み重ねられてきた経験的な社会調査の、生産的な結合の成果だった。一九九〇年前後の合衆国の思想的変貌を知るうえで、二冊のベスト・セラーが示唆的である。すなわち、一九八七年にベスト・セラーとなったアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』と一九九二年に刊行されたフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』である。前者では、ニーチェ、ウェーバー流のニヒリズムが健全なアメリカの教養世界を蝕んでいる様子が保守派の立場から描かれ、後者では、同じく保守派の立場から、自由主義社会の勝利宣言が高らかに発せられている。実際に

社会主義圏の崩壊があいだに挟まっていたとはいえ、この二つのベスト・セラーがじつは同じコインの裏表の関係にあったという捉え方がいまでは重要ではないか、と思える。つまり、ブルームのいう「アメリカン・マインド」なるものの抱えている危うさ、曖昧さをそのままにして、フクヤマの勝利宣言がその空洞を埋めたのではないか、ということである。

現在、合衆国の政治思想の領域では、リベリズムとコミュニタリアニズムをめぐる論争が継続されているが、その淵源と見なしうるのが、一九七一年に刊行されたジョン・ロールズの『正義論』である。とはいえ、すくなくとも日本でロールズの理論が盛んに議論の対象となるのは、一九九〇年代に入ってからだったといえる。それまでは、マルクス主義的の革命がいっさいのもつれた糸を両断する万能の鉈のように見なされていた節がある。アーレントもロールズも、マルクス主義という太陽が沈んだあとに、はじめて夜空に浮かび上がった星々といった意味合いがあったのではないだろうか。

英語圏におけるこの間の顕著な特徴のひとつに、かつての植民地ないし準植民地地域からの出身者が、かつて

の宗主国の言語である英語で、その当の植民地支配への批判を組み込んだ新たな潮流を作りだす、という傾向がある。

たとえば、イギリスの旧植民地ジャマイカ出身のステュアート・ホールは、イギリスにわたって、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムの大きな潮流を生み出した。あるいは、キリスト教徒のパレスチナ人としてエルサレムに生まれたエドワード・サイードは、合衆国にわたって『オリエンタリズム』を著して、ヨーロッパおよび合衆国におけるオリエント表象を鋭く批判した。この流れには、インド出身のガヤトリ・C・スピヴァク、同じくインド出身のホミ・K・バーバ、ベトナム出身のトリン・T・ミンハなど、いくつも名前をくわえることができる。

そういう流れのいわば源流に位置しているのが、フランツ・ファノンといえる。ファノンはフランスの植民地だった西インド諸島のマルティニークに生まれ、フランスで精神医学を学び『黒い皮膚・白い仮面』を著し、精神科医としての任地アルジェリアでアルジェリア解放闘争に参加し、その渦中で死去した。イングランドに生ま

れ、マルクス主義の立場にたつて膨大な文芸批評を書き継いでいるテリー・イーグルトンも、父方、母方とも祖母がアイルランドからの移民であり、自分はその三世である、という意識を強固に抱いている。その意味においては、イーグルトンもまたファノン以来の系譜に位置づけることができるだろう。

フェミニズム、環境思想、生命倫理、平和学

近代におけるフェミニズムは、フランス革命による「人権宣言」さえもが男性にのみ人権をあたえていることに抗議するところから出発したが、二〇世紀に入ると、投票権、参政権、就労の権利など法的な権利の獲得を超えて、家庭から職場、地域社会など、さまざまな生活の場で男女の平等をもとめる運動として展開された。とりわけ一九六〇年代に至って、いわゆるウーマン・リブの運動が世界規模で繰り広げられることになった。

理論的にはマリアローザ・ダラ・ユスタの『家事労働に賃金を』、シュラミス・ファイアストーンの『性の弁証法』などが大きな影響をあたえた。ウーマン・リブの

運動はその後、同性愛など性的マイノリティの解放ともつながっていった。女らしさ、男らしさなど文化規範にもとづくジェンダーの問いなおしがさまざまな局面で追求され、人間の解放を考えるうえでは、階級、民族にくわえて、ジェンダーからの視点が不可欠なものと承認されるにいたった。カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアリズム批評においても、多くの女性研究者が登場し、そこにはフェミニズムの視点がさまざまな形で組み込まれている。

ここ一〇年あまりはフェミニズムにたいする声高な批判も唱えられているが、それはさまざまなマイノリティの権利擁護にたいする批判と重なっているところがある。そこに見られるのは、マジョリティ側が自分のほうこそをマイノリティと感じて、屈折した不満と怒りをマイノリティに差し向ける態度である。なぜそのような事態にいたっているかを、戦後七〇年の歴史のなかで私たちは冷静に問いなおす必要があるにせよ、フェミニズムが切り拓いた地平からけっして後退してはならない。

一方、環境問題もまた、戦後七〇年のなかで深刻に問われることになった。一九七二年、ローマクラブの発

した『成長の限界』は、現在のままの人口増加が続けば、二〇年で石油資源が枯渇し、環境破壊の悪化ももたせて、百年以内に人類の成長は限界に達すると説いた。それは人類の未来に対する深刻な警鐘と受けとめられた。これを受けて各国は原子力発電の開発に向かうことにもなったが、一九八六年に生じたチェルノブイリ原発事故は、原発という選択も危険きわまりないことを知らしめた。当時、ソ連邦内にあったチェルノブイリでの事故は、社会主義政権下での環境汚染の実態にも目を向けさせた。以来、私たちの社会は、核戦争の恐怖とともに、原発事故とその余波という日常的な脅威にさらされるようになった。二〇一一年の東日本大震災と福島原発の事故は、私たちの足下でそれが現実のものとなったことをあらためて知らしめた。世界の先陣を切って原発と核兵器の廃絶を唱えるべき国で、原発再稼働に向けて着々と事態が進展しているかの現状は、どう考えても正気の沙汰ではない。

ローマクラブの『成長の限界』も受けて著された哲学者ハンス・ヨナスの『責任という原理』は、石油などの資源を使い果たし、環境汚染を推し進めることによる、

未来世代への責任という重大な問題提起となった。この本が発表されたのちに生じたチェルノブイリ原発事故は、ヨナスの主張の切実さを現実において裏書きすることになったといえる。

ヨナスは同時に、脳死による臓器移植にも早くから反対の論陣を張っていたが、彼の生命倫理をめぐる発言の重要性も二一世紀になってようやく光があてられることになった。たとえば、一九五八年ごろ書かれたアーレントの『人間の条件』のプロローグには、オルダス・ハクスリーが一九三二年に発表したディストピア小説『すばらしい新世界』を踏まえて、試験管ベイビーの話題が登場するが、それが真実味を帯びてきたのが二〇世紀の後半である。以来、生命倫理をめぐる問題は、それまで人類が直面することのなかった新たな問いを投げかけている。

最後に、アメリカ合衆国を中心とした世界秩序は、二〇世紀の後半から宗教的原理主義との対決を課題とするようになった。二一世紀の幕明けとともに、ニューヨークの貿易センタービルなどへの旅客機の激突は、象徴的な出来事となった。それへの報復として生じたイラ

ク戦争も、事態の根本的な解決にはほど遠く、テロリズムへの恐怖をかえって世界に蔓延させる形になった。このとき、直接的暴力に対して、植民地支配や南北格差が孕んでいる構造的暴力の概念をいち早く提示してきた、ノルウェーの思想家ヨハン・ガルトゥングの「平和学」の主張は、ますます重要になってくるだろう。

細見 和之（ほそみかずゆき）

一九六二年兵庫県篠山市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士（人間科学、大阪大学）。現在、大阪府立大学現代システム科学域教授。ドイツ思想専攻、詩人。主な著書に、『戦後』の思想（白水社）、『フランクフルト学派』（中公新書）、『アドルノ——非同一性の哲学』（講談社）、『アイデンティティ／他者性』言葉と記憶（ベンヤミン）『言語一般および人間の言語について』を読む（以上、岩波書店）、『アドルノの場所』ポップミュージックで社会科（以上、みすず書房）など。主な訳書に、ベンヤミン『パサーージュ論』全五巻（共訳、岩波現代文庫）、ヨナス『生命の哲学』（共訳、法政大学出版局）、ローゼンツヴァイク『救済の星』（共訳、みすず書房）など。また、詩集に『ホッチキス』（書肆山田）、『家族の午後』（滯標）など。

体験的読書案内——世界の戦後70年に際して・ブックガイド

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
大月書店	—	マルクス＝エンゲルス全 集 (online版)	カール・マルクス、フリー ドリヒ・エンゲルス	年間会費 12000	
人文書院	—	弁証法的理性批判Ⅰ、Ⅱ、 Ⅲ	ジャン＝ポール・サルトル	—	1962- 1973*
みすず書房	4622019336 4622019343	知覚の現象学〈1〉〈2〉	モーリス・メルロー＝ポン ティ	4800- 5400	1980- 1981
新潮社	4105067014	言葉と物	ミシェル・フーコー	4500	1974
法政大学出 版局	4588010002	エクリチュールと差異	ジャック・デリダ	5600	2013
国文社	4772001014	全体性と無限	エマニュエル・レヴィナス	4800	1989
岩波文庫	4003369210	啓蒙の弁証法	マックス・ホルクハイマー、 テオドル・アドルノ	1260	2007
ちくま学芸 文庫	4480082169	ベンヤミン・コレクション 1	ヴァルター・ベンヤミン	1500	1995
白水社iクラ シックス	—	希望の原理 全6巻	エルンスト・ブロッホ	3800- 4300	2012- 2013
未来社	—	コミュニケーション的 行為の理論 全3巻	ユルゲン・ハーバーマス	各 4800	1985- 1987
社会思想社	4390600477	正気の社会	エーリッヒ・フロム	—	1958*
みすず書房	—	全体主義の起原	ハンナ・アーレント	4500- 4800	1972- 1974
みすず書房	4622049661	大変貌	スチュアート・ヒューズ	4300	1999*
みすず書房	4622018612	アメリカン・マインドの 終焉	アラン・ブルーム	4000	1988*
三笠書房	4837956563 4837956570	歴史の終わり 全2巻	フランシス・フクヤマ	各 2100	2005
紀伊國屋書 店	4314010740	正義論	ジョン・ロールズ	7500	2010
平凡社ライ ブラリー	4582760118 4582760125	オリエンタリズム(上)、 (下)	エドワード・サイード	各 1553	1993
みすず書房	4622050285	黒い皮膚・白い仮面	フランツ・ファノン	3400	1998
インパクト 出版会	4755400056	家事労働に賃金を	マリアローザ・ダラ・コス タ	2000	1986*
評論社	4566052048	性の弁証法	シュラミス・ファイアス トーン	—	1972*
ダイヤモンド 社	4478871058	成長の限界 人類の選択	ドゥネラ・H・メドゥズほ か	2400	2005
東信堂	4887139992	責任という原理	ハンス・ヨナス	4800	2010

*は、品切れの可能性がります。

図書館にとって専門書とはなにか？—— 知の再生産を維持・拡大するために

人文社会系の専門書出版社にとって、大学図書館は研究者・学生へ書籍を提供する場であるとともに、出版事業を継続していくうえでも重要な存在である。とりわけ昨今の「出版不況」において、学術書の販売部数が減少していくなかでは出版社が大学図書館を意識する局面がますます増している。

このような問題意識を背景に、人文会は二〇一四年十一月七日に行われた図書館総合展で「専門書出版社と図書館」と題したパネルディスカッションを開催した。新刊販売部数、図書館の所蔵、利用の状況、お互いの要望などを端緒に、四名の関係者がそれぞれ論じた。

パネリスト 加藤信哉(筑波大学附属図書館副館長)

田村俊作(慶應義塾大学メディアセンター所長)

江草貞治(有斐閣代表取締役社長)

司会 持谷寿夫(みすず書房代表取締役社長)

報告 ①

筑波大学附属図書館における

新刊学術書の収集について(加藤信哉)

筑波大学図書館は一九七三年の筑波大学開学と同時に設置された図書館である。開かれた大学図書館として地域社会及び国内外の研究・教育機関と連携し、学習、教育、研究活動の支援に不可欠な学術情報基盤としての機能を担うことを使命としている。中央図書館と四つの専門図書館(体育・芸術図書館、医学図書館、図書館情報学図書館、大塚図書館)が一元的な管理体制の下に運営されている。資料の集中管理と全面開架方式の採用、平日の夜間開館や土・日・祝日の開館、充実したレファレンスサービス、ウェブによる各種サービスの提供、図書館ボランティアの支援等を実施している。

蔵書数は図書が二五九万冊、雑誌が三万二〇〇タイトル。そのほかに文部省発行錦絵、コメニウス文庫、ベッ

ソノコレクション(キリシタン関係図書)、昌平坂学問所関係資料などのコレクションを有する。電子的資料としては、この貴重書の電子化のほかに、電子ジャーナル二万五四〇〇タイトル、電子書籍二万一九〇〇タイトル、データベース八〇種がある。

蔵書に関する課題としては、第一に図書購入冊数の減少、特に洋書と研究費による購入冊数が減っていることがあげられる。第二に新しいニーズに対応した学習用図書の整備がある。たとえば英語の多読用資料や試験問題やキャリア支援のための資料などがまだ未整備である。第三に電子ジャーナルなど電子的資料の整備と予算の確保(それも億単位)の必要性である。第四に図書の収容スペース問題である。第五に冊子体資料と電子的資料が混在する中で情報の発見と入手のためのプラットフォームの整備である。

次に予算、収書、利用について。二〇一四(平成二六)年度の図書館予算は約六億円であった。そのうち資料購入費が約四億六〇〇〇万円。この部分を図書購入費、製本費、雑誌購入費、電子的資料購入費と分けており、電子的資料購入費、つまり電子ジャーナルとデータベース

を整備するのに三億六三〇〇万円となっている。

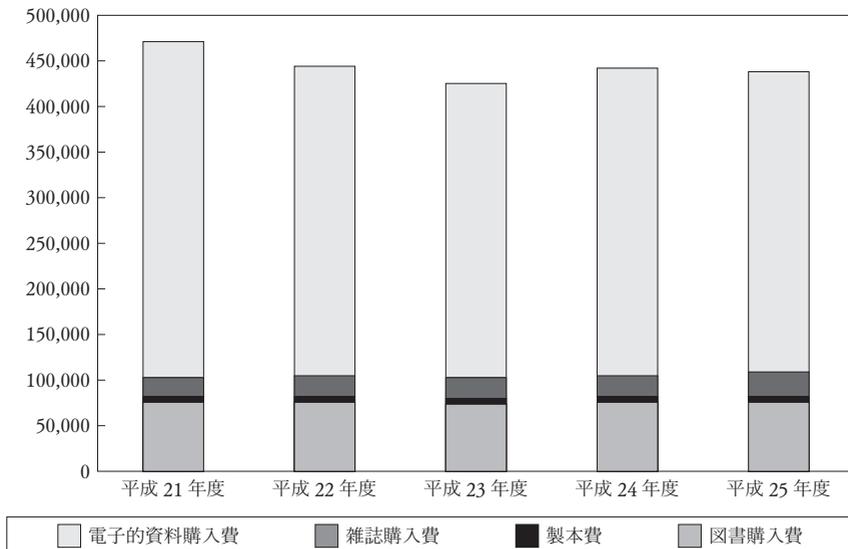
すなわち資料購入費のうち過半は電子的資料の購入費に充てているのである(図表1)。

購入する図書を、「教育・研究学術図書」、「人文社会系コレクション」、「研究用叢書」、「参考図書」の四つに分類している。「人文社会系コレクション」には約九〇〇〜一〇〇〇万を用意しており五〇万、一〇〇万程度の高額なものを買う予算である。

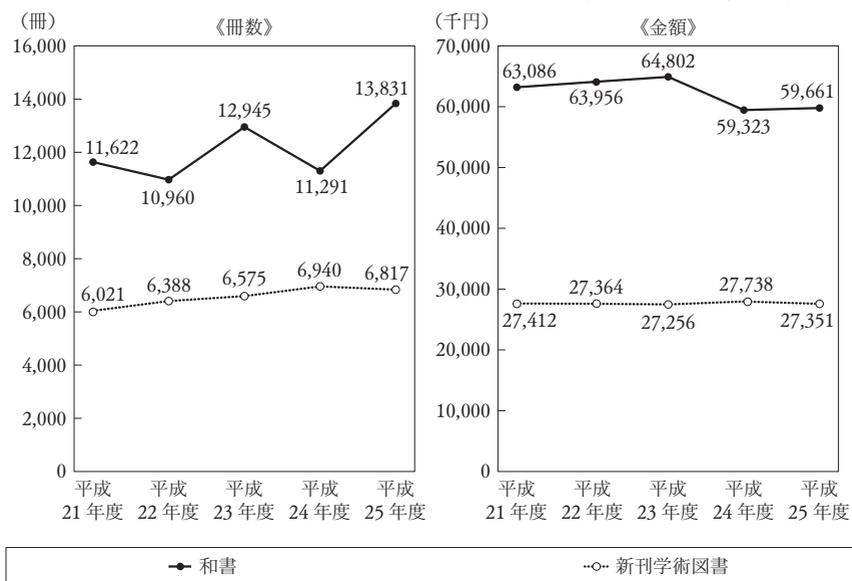
自ら選書する図書である「教育・研究学術図書」をさらに三つに分類している。新刊学術図書、教育用図書、学生希望図書である。教育用図書とはシラバスに掲載されている授業に関するもの、学生希望図書は学生からのリクエストなので、実際に和書学術書を買うための予算は新刊学術書に分類される。これは一年以内の新刊のなかから図書館員が選んでいる。文学作品、児童書、実用書、高校生以下を対象にした図書は収書範囲から外されている。

この四年ほどの新刊学術書の購入の推移をみると、冊数では毎年六〇〇〇冊、金額では二七〇〇〜二八〇〇万を購入している(図表2)。和書は約一万二〇〇〇冊、

図表1 図書購入費決算の推移——平成21(2009)年度～平成25(2013)年度
(千円)



図表2 和書と新刊学術図書の整備状況の推移——平成21(2009)年度～平成25(2013)年度



六〇〇〇万円が推移しているから、かなりの割合で新刊図書による整備が占めていることがわかる。新刊学術和書の予算はきちんと確保していることになる。

貸出は残念ながら減少している。和書全体ではトータルでは二〇〇九(平成二二)年度の三九万八五一七冊から二〇一三(平成二五)年度の三〇万九四五八冊に。新刊学術書は二〇〇九(平成二二)年度の十二万冊から二〇一二(平成二四)年度の一〇万冊になっている。

報告②

慶應義塾メディアセンターにおける 和書の収集と利用(田村俊作)

慶應義塾大学メディアセンターは六キャンパス(三田、日吉、信濃町、理工学、湘南藤沢、芝共立)のメディアセンターと本部によって成り立っている。それぞれのキャンパスはそれぞれのキャンパスで選書をするが、受入から整理までは集中処理によって無駄を省くという「分散と協調」が運営の基本にある。

予算について基本は各キャンパスのメディアセンターが集中管理するという形をとっているが、三田と日吉に

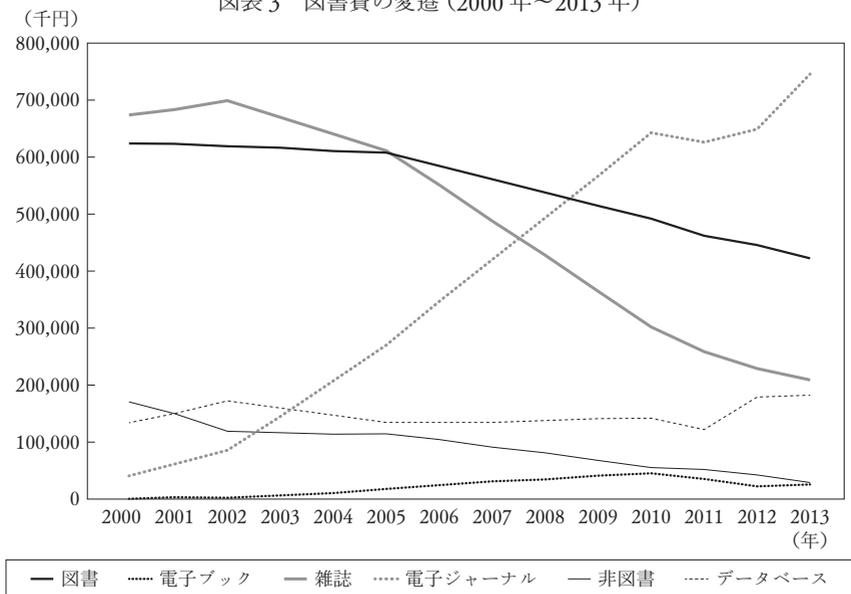
のみ学部が選書する「研究室図書予算」があり、学部が選書権を持っている。

年間の図書関係予算は十六億七六〇〇万円である。これが図書支出と図書資料費に分かれており、図書資料費がいわゆるデジタル関係の支出となる。図書支出(印刷本)が七億八〇〇〇万に対して図書資料費(デジタル)が八億九〇〇〇万円と、すでにデジタルの購入費が印刷本の購入費を上回っており、今後一層増えていくと予想される。私立大学会計基準からいうと、印刷本は資産になるがデジタルは資産にならないので、図書支出が減って図書資料費が増えることは財務的には大学の資産を減らしていることになる。慶應の財務部門の理解は得ているが、私立大学全体に係わる問題だと捉えている。

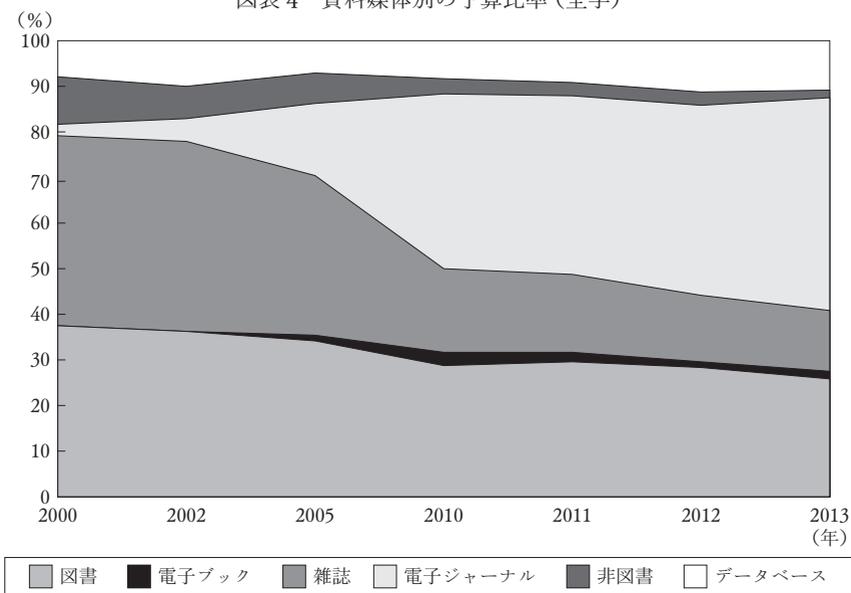
図書費の変遷を費目別にみると(図表3)、電子ジャーナルの支出が増えているいっぽうで、図書支出が下降している。ただそれでも四億円規模の予算があるので和書学術書が買えない、というような状況ではない。

また、資料媒体別の予算比率をみれば大きく減っているのは雑誌なので電子メディアの登場によって減少したのは、慶應でみると紙媒体の雑誌であり、和図書は徐々

図表3 図書費の変遷（2000年～2013年）



図表4 資料媒体別の予算比率（全学）



に減少しているものなお従来の水準は保っていると
言える(図表4)。

選書についてはキャンパスごとに異なる。三田の
場合は学術系出版社三六社の出版するものは原則として全
点購入し、人文会加盟出版社の出版物はほぼすべて購入し
ている。そのほかにはDMや『ウィークリー出版情報』
から選書している。いっぽう日吉は主に『ウィークリー
出版情報』で「一般向け」とされているものの中から選
書をしている。

地区によって収書方針に違いがあるものの、和図書収
書の中心は学術出版社の出版物であり、三田を中心に主
な人文・社会科学系学術出版社の出版物はほぼ全点収書
している。

報告③ 有斐閣における学術書の刊行状況(江草貞治)

有斐閣は、法律、政治、経済、経営、社会、心理、教
育、福祉などの各ジャンルの出版物を年間二〇〇点ほど
刊行している。学術書・専門書のほかにいわゆるテキスト

トが刊行の多くを占めており、その比率は、学術書対テ
キストで三対七となる。

今回は小社刊行書籍の大学図書館所蔵状況を調べてみ
た。

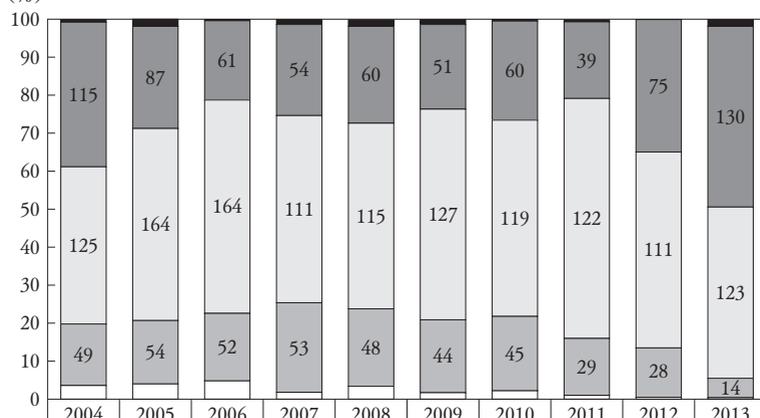
例えば大沢真理先生の『生活保障のガバナンス』の大
学図書館の購入状況を○¹○²○³で調べてみたところ所蔵館
が一六二館と表記された。

この積み上げグラフ(図表5)は、たとえば有斐閣の
二〇〇四年に刊行された本で図書館が購入していない書
籍が二アイテムあるということを示している。二〇一三
年刊の大澤先生の本は一六二館所蔵しているので二〇一
三二〇〇館の一三アイテムの中に入っている。つまり
最大二〇〇館が購入した本が二〇一三年刊のものでは
一三アイテムある。一〇〇館購入した本が一三〇アイ
テムあるということである。

おわकारの通り年間三〇〇アイテム以上購入してくれ
る図書館が漸減傾向である。逆に年間一〇〇アイテムあ
たりの層が増えていくという状況にある。

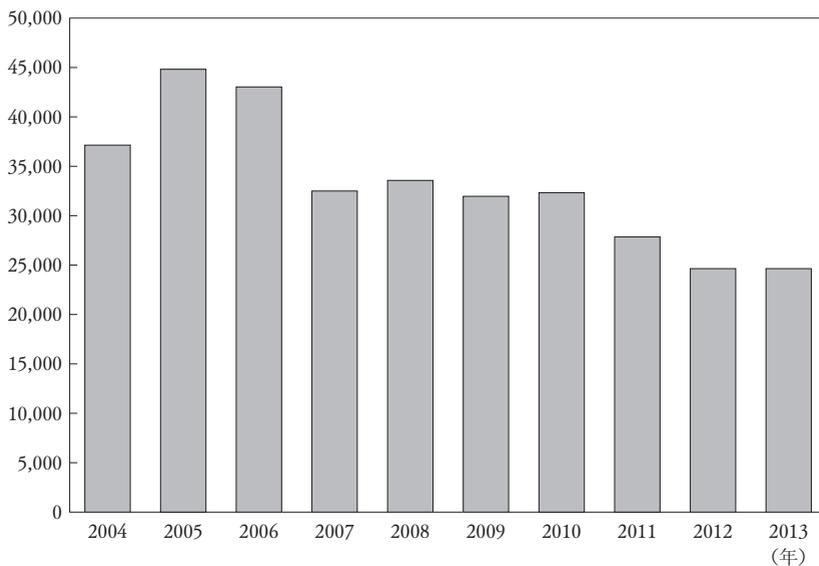
次のグラフではのべ購入館数を出してみた(図表6)。
二〇〇五年に比べて二〇一三年の購入はおよそ五割五分

図表5 CiNii でみた大学図書館購入状況



	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
□ 0館	2	6	1	3	4	3	1	1	0	5
■ ~100館	115	87	61	54	60	51	60	39	75	130
□ ~200館	125	164	164	111	115	127	119	122	111	123
■ ~300館	49	54	52	53	48	44	45	29	28	14
■ 301館~	11	13	14	4	8	4	5	2	1	1

図表6 CiNii でみた大学図書館購入状況——のべ購入館数合計



ぐらいになっている。CZIIの収蔵館全体でみると、残念ながら右肩下がりとなっている。

筑波大学や慶応義塾大学はそんなことはないということなので安心してはいるが、しかしトータルで見るとこのように有斐閣の書籍の図書館購入数は漸減傾向にあり、利用者が弊社の本に出会えているのかというところが気になる。

報告④ 人文会会員社の大学図書館所蔵状況（持谷寿夫）

人文会所属の二〇社のうち一七社の新刊を、どれだけの図書館が所蔵しているのかについてCZIIを使って調べてみた。対象は二〇一二年四月から二〇一四年三月刊の単行本二九三八タイトル、文庫・新書は除く。

それによると平均で一タイトルごとの図書館所蔵数は一〇六館、つまり一タイトルを一〇六館が購入したということになる。タイトルごとの、一般の読者なども含めた全販売部数のうち図書館販売シェアは平均で一％であった。ただし、人文会出版社といっても学術系の出版

を主とする出版社と教養書系の出版を主とする出版社の二グループにわけてみたときに、比較的館購入率が高いと思われる学術系出版社群の図書館購入シェアは一五％であった。

価格帯別の所蔵状況(図表7)をみると、まずは価格に関係なく一〇〇冊強を所蔵しているということがわかる。また高額な書籍は必然的に発行部数が少ない、販売数が少ないので、図書館販売シェアが高まっているということもわかる。

ディスカッション

以上、実証的なデータをふまえた四報告を経て、持谷氏の司会で討論は始まった。論点は多岐に亘ったがここでは簡単に「選書」と「デジタル化」のついでの議論を紹介しておく。

まずは「選書」について。大学図書館運営において「貸出」というのはどの程度重要視されるのか。貸出数が多い／少ないということが実際の図書館の選書に反映

図表7 価格帯別の所蔵状況

価格帯	タイトル数	平均所蔵館数	シェア
～1,000	16	44	1.9%
1,000～	506	83	2.4%
2,000～	1,007	104	5.5%
3,000～	667	126	9.8%
4,000～	261	117	13.2%
5,000～	113	111	14.3%
6,000～	114	118	16.4%
7,000～	67	106	16.9%
8,000～	37	110	18.8%
9,000～	37	92	17.9%
10,000～	82	81	16.2%
20,000～	20	151	18.7%
30,000～	5	120	27.9%
40,000～	1	34	33.3%
80,000～	1	42	25.9%

価格に関係なく
100冊強を所蔵

高い本ほど
図書館シェアが
高まる

されるのか、という持谷氏の質問からスタートした。この質問にたいして、加藤氏は「人文社会系の著者の場合、図書館にいけばその分野の関連する書籍を網羅的に見ることができることが重要である。貸出というのは利用の一面でしかない」とコメント。

田村氏は「研究用と教育用に分けて考えるべき」との前置きをしたうえで、「教育用の場合には基本的には貸出数を参考にしていよい。利用されればされるほど学生がよく勉強しているということを示している。しかし一方、研究用図書はそうした観点からみると非常に危険である。研究用の図書というのは数字に表れてくる「貸出」とは別の観点で揃えなければならないと思っている」と述べた。

貸出数は一つの参考値ではあるが、大学図書館の選書において、とくに高度な学術書の選書においては必ずしも最優先されなければならないものではないという見解を示した。

そのほか選書基準について田村氏による亜細亜大学図書館の事例紹介があった。亜細亜大学図書館では一〇年前から選書基準を設けている。この日会場に参加してい

た同図書館選書担当者の発言とスライドから、同大学図書館の選書方法の精緻さの一端を知ることができた（同図書館の選書については次号の人文会ニュースに寄稿していただく）。

ついで議論は「デジタル化」に移った。

学術情報の電子化はもはや避けられそうにない。大学図書館と出版社がこの電子環境下で、デジタルとどのようにつきあっているのかが問われている。図書館へは今後さまざまなモデルの電子書籍サービスが提案されるであろうが、電子環境下での図書館蔵書構成とはどのようなものになるのだろうか。持谷氏の以上の問題意識について、まず加藤氏が、「現段階では日本の電子的資料については積極的に買うようなものがない」ものの、「多様なビジネスモデルが出てくるのはひとつの突破口になるかもしれない」と発言。

田村氏は、「将来的に電子にシフトしていくのは明白であり、どのくらいの期間で紙が電子に移行するのかは問題」であるとした。さらに「スペースの問題を考えた印刷本はもうこれ以上増やせない。すなわち電子に移

行するというのは物理的制約からも必然である」と。

そして、田村氏は、これからの図書館は単に資料を提供する機関である、という程度のコンセプトではないのではないかと指摘する。「図書館は大学の知のインフラをデザインするような場所でなくてはならない。なぜなら、インターネット環境下で情報の共有が容易になっただけで、学内における学術情報をどのように共有すべきなのかを考えているのは、図書館のほかにないからである」と述べた。

出版社側から江草氏は、「これからしばらくの間は紙とデジタルの図書資料が併存していく形になる」としたうえで、「本と本がどういう関係で結ばれているのかという点、あるいは紙とデジタルが横断的につながっていることが実感できるようなシステムや、本を発見していくための仕組みを作り上げていくために我々も協力してゆきたい」と述べた。

「文責・橋元博樹（東京大学出版会）」

晶文社の「まるごとヨシモト」

間宮 幹彦（『吉本隆明全集』編集者）

たいがいのスーパーで売っているありふれた息の長い洋菓子商品に山崎製パンの「まるごとバナナ」というのがあります、ホットドッグに想をえたのかとおもっていたら、ちゃんとしたフランス菓子のオムレットというものの系譜にあるようで、あふれそうなホイップクリームとバナナ一本を柔らかなスポンジ生地でくるんだものをセロファンで包み、下部を熱処理で圧着し左右を絞って開封式のテープで閉じた形で売られています、どうせタマネギやトーフや豚肉などと一緒に買い物袋に入られて買われてゆきますから、家に帰り着いたときには少し歪んだりはみ出したクリームがセロファンにべっとり付いたりもしているそれを、テープをとりはずし閉じられたセロファンを押し拡げくっついたクリームを意地汚く余さず拭い取って本体を眼下に収めたとき「まるごと」への期待はピークに達し、一度には口に入れないそのポリariumをいくつかに切り分けながら平らげ終えたときのたっぷりした満足感、早く食べちゃいたいからもう食べちゃったのかまでの至福の時間こそが、じつは全集というものに流れている時間でもあるのです、全集はいかめしくスベテアツムと読み下す

のが正しいのでしようけれど、あっさり「まるごと」といってしまうほうがそこへと誘う欲望を言い当てる呼び方だといいたくもありません、『吉本隆明全集』は「まるごとヨシモト」だというわけです、「まるバナ」話を枕にふったのはバナナとヨシモトがあるとき不意にエレキテルな名称連合を果たしたよしみでというわけではありません、著者の書く行為の中心に「まるごと」があるからなのです、はからずも『言語にとつて美とはなにか』を書き始める頃合いにあるところでその理念の所在を「まるごと」と傍点ふって指し示してさえいるくらいです、嘘だと思ふんなら探して読んでみてください、では全集の「まるごと」とは何でしょう、第一義にそれがかたよらないすべての量を示そうとしていることはたしかです、文章はふつう上から下へ上から下へという運動を繰り返しながら右から左へ移ろってゆき、それが書く行為をなぞるような読む行為であり視覚の移動とひとまとまりの区切りと所持や値段の便宜がページや画面やその数量を限定して本の時間の流れと空間の拡がりをつくっていきますが、全集を構成する時間と空間も一冊には収まりきらずに複数のおおむねかなりの数の巻をなして、著作の書かれ発表された時間の順序と書かれた文章の性格によるジャンルや分類によって振り分けられています、どのような全集もこの二つの組み合わせによって構成されるしかありません、あたかも著者の言語表現論の基軸である自己表出と指示表出にそれに対応しているかのようです、著者のこれまでの二つの著作集は明らかにジャンルによる空間的な分類によって構成されていますが、「まるごとヨシモト」の場合は時間軸に力点を置いた構成をとっています、それにもなつて長編ものと短いエッセイの類いもなるべく区分せ

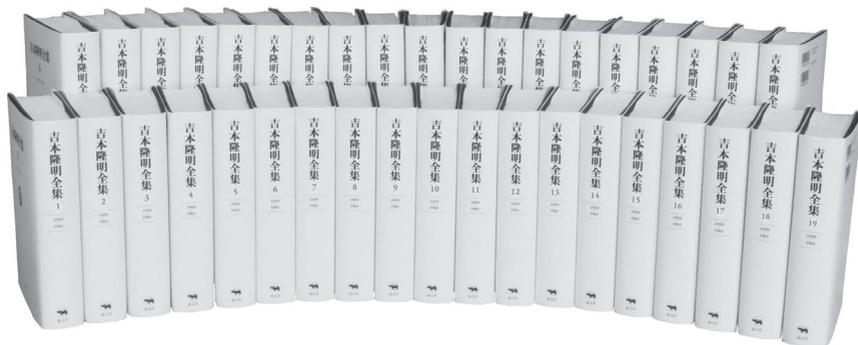
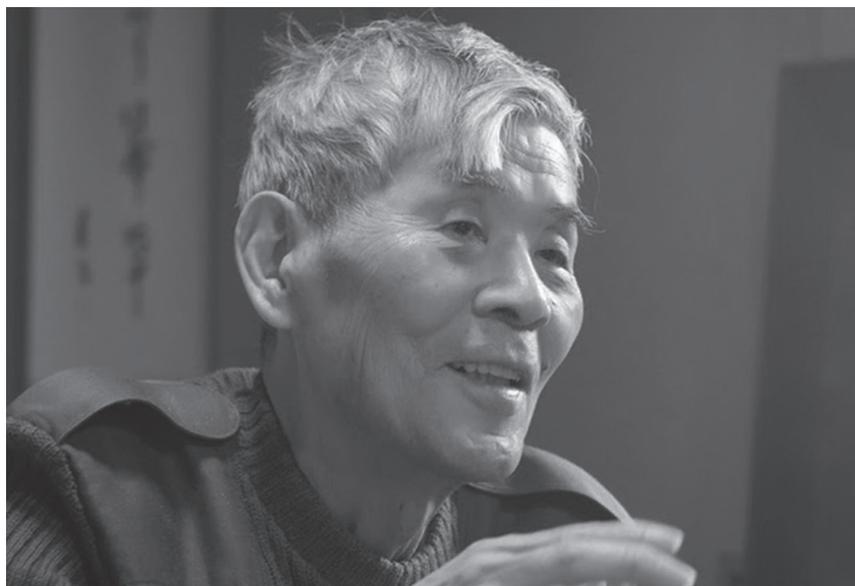
ずに時系列に配置するよう心がけましたが、それもヨシモトという著者の「まるごと」はそういう軸足で構成することがより「まるごと」らしく実現できるというかんがえにもとづいています、著者の「まるごと」を形作ってゆく運動が読むときによりよく追体験できるように構成するのにそれが一番ふさわしいというかんがえです、いやむしろそれは著者の書くもの自体からうながされてとられた形式だといったほうが正確なのです、恐ろしく長い時間をかけて書きつがれたものや重複併行して書かれたものやそれらの間を縫って休みなく数多く書かれたものが同在しているのですから、巻の順序がそのまま時間の順序を表示しない場合も数多くいくつかの巻が同じ時間の幅のなかに入っている場合もあるわけですが、それでもおおむね幅のある時間の流れを全体的には構成しています、「まるごと」が量を第一義に示したとしてもそこに時間の過程と運動が含まれていることは説明しようとする言葉の中にそれが含まれてしまうことでも明らかです、最大限の量は円や球になりますがそれが完結のイメージを与えながらそうならないのは運動がもたらしていることです、それはどこへ行こうとしているのでしょうか、「まるごと」の拡大運動が根ざしている幼児的な願望のめあては生じたたんに逃げ去ってゆくものでもあり、その性懲りのないたちごっここの追求の痕跡は老人の手に無数のしわとなって刻まれています、決して閉じられずに円環してゆく螺旋的な運動の軌跡が書くことのも中心にもあり、始まりと終りは薄明の中にあるその螺旋運動のワンコイルを収めようとするのが全集となっているのです、さて著者はおびただし単行本をその時々に出しており、書かれたものはほとんどそれらの著書に収録されていてその収録比率

はとんでもなく高いものですが、それらの本を足し算すればこの「まるごと」になるのかというところはなりません、その時点での全集、選集であった二つの著作集を含めてもそうはなりません、いわゆる集めものの単行本は枠を外されることになりそれによって失われるものがあることは確かですが、単行本はもとより二つの著作集も限定されたその時々の「まるごと」であり更新されてより大きな「まるごと」のなかに組み込まれ再構成されることは著者が書きつづけていった運動のもたらす必然で、そのことによってはじめてあらたに視えてくるものがかならずあるのです、読み直すこと自体が最初と同じようには読めないものです、どういう編集構成のなかで読むかによっても異なった発見に出会うことになります、全著作集の別の巻やひとつの巻の別の部立てに隔てられていたものを時間に即した間近な配置の流れの中で読んでいく時にいままで気がつかなかった面白さと新鮮な印象に見舞われるはずなのです、「まるごと」を更新することはその著者が読み継がれるのに欠かせないでしょう、でも必要なプロセスであり、それを踏むことではじめてあらたな発見を現出させることができますのです、棺を覆ってはじめて定まる、定まるのか定まらないのか定められるのか定められないのか、そういうことを見極めようとするのが全集をあらたに編む大きな理由としてあります、ところで著者はある単行本のあとがきでそこに収録されているものが指向するところを「ただひとつの光源」と書いているのですが、それも「まるごと」の中心を指差しているとおもわれます、全集の「まるごと」はおびただしき語句や文からなっているひとまとまりの文章がさらにいくつもいくつも集められている限定されていながら限定されないかの

ように拡がっている著作の著者の生涯にそくした量を指していますが、じつは同時にその量に還元できないものでもあります。「まるごと」は「光源」のような白熱した中核でありかつ辺縁までもじぶんのものと主張していて、それは読むことで読者のなかに転移・呼応してゆくのですが、不思議なのはすべてを読まなければ「まるごと」にふれられないかといえど決してそんなことはなく、読む過程の中で不意にあつという間にまたいつともしれずいつの間にかつかまえられるしてしまうものでもあります、読むことにかかると「まるごと」の病いは接触感染だととりあえずいつてもかまわないのでしょうかそれがどこか空気感染のおもむきもあつて、一陣の突風に巻き上げられるかのようにまた微風になぶられまどろみへ誘われるかのようにやってくるものでもあります。「まるごと」はすべてであり中核であり辺縁に偏在するものであり、一冊の本のみならず一篇のエッセイにもごく短いフレーズにすら潜んでいて待ち構えており、その幼児的な願望はいつも拡大しようとうずうずしていますから、そうしなくてもいつもその方位に憑かれていた贅沢な願望です、いつどこでだれによってどんなかたちでとらえられるかわからない「まるごと」をとことん味わってもらうためにいつでも待機しているのが全集です、そのため全集はその著者の時間も空間もくまなく完備させようとしているのですが、それを手元に置こうというのはとつともなく贅沢で豪華な欲望の充足です、全集の刊行が発表されたときじぶんはたくさん単行本をもっていてその上全集までも買わなければならないのかというぼやき声が西のほうから漏れ伝わってきましたが、もちろんそれで満足できるのであればちつとも無理して買うことはないのです、むしろそつがな

い常識的な判断に収まっているというべきでしょうそれは、しかし、全集というのはどんなに現世に繋がれるための合理的な大人の計算で取り繕っているように見えても、もともと超常識的なはつきりいえば狂気の沙汰なのです、書きに書いた人も書いた人だしそれを採す人も採す人だし編む人も編む人だし出す人も出す人だし買う人も買う人だし読む人も読む人だしというみえない手と手を取り合った無謀な偏執の渦になわれてかろうじて成り立っています、それはこれまで未収録のものの多寡などにかかわらないことで、残るくまなく満たされた「まるごと」にいつでもアクセスできる状態にじぶんをスタンバイしておこうとする果てしない願望に憑かれたものが全集をもたらししているのです、視線は頭の上を這い回り宇宙の彼方から俯瞰しているつもりでも実際は眼の紙魚となって原稿やゲラの上を這い回りどうでもよいこととどうでもよくないこととの危うい境界線を、剥くか剥ぐか斑か斑か黒髪か黒髻かほんとかほんとうかともろめきながらたどってゆくのが全集の編集作業につきまとうもので、都か区かどころじゃございませぬ、そんな次第で全集の編集者はまちがいはなく偏執者の目つきになっていますからおめにかからずここまで読んでいただけただけなのは幸いです、なにせこの一文は、発足して一年四冊でつぶれもせずにあろうことか東京オリンピックが終ってもまだザトペックな与太走りをつづけるつもりでいるわが「まるヨシ」さんに献る自家撞着的・自問自答的な祝儀花一輪のつもりなのです、わかっていただけですしょうか？

(ものまみや みきひこ)



年末年始は本の街 神保町で人文書

副田 陸児（三省堂書店神保町本店店長）

当店では2014年11月11日から2015年1月10日までの2ヶ月間、「年末年始は本の街 神保町で人文書」（人文会フェア）というタイトルの人文会会員社のブックフェアを開催いたしました。当店は1階から6階の多層フロアになっており人文書コーナーは4階と5階にあるのですが、フェアを実施したのは2階の下りエスカレーター前の壁面棚でした。棚は連続した15スパンを使用して約2500アイテム3100冊と大規模なフェアとなりました。2ヶ月間の売上は420万円1800冊で大変いい結果となりました。1日当たりの売上でいうと約6万8000円となります。

このフェアを行うに至った経緯を簡単にご紹介いたします。

当店では「人文会フェア」の前に2014年8月22

日から10月20日までの約2ヶ月間「科学と技術図書フェア」を実施いたしました。このフェアは当店の他に日本理化学総目録刊行会、家政学図書目録刊行会、農業書協会を主催者としてトーハンに共催いただいたフェアでした。実施場所は理工学コーナーのある5階の上りエスカレーター前壁面棚9スパンで3500アイテムを展示しました。大規模でしたが売上も約400万円1600冊と好成績でした。このフェアを実施して気づいたのは「出版社1社のみフェアで売上を作るのは難しいが、同じ傾向の出版社数社のフェアでかつ店内で大々的にフェア告知を行えば売上を作ることができる」ということでした。

以前から上司に「人文会と連携して何かできないか？」と言われていたこともあり「科学と技術図書フェ

ア」終了後に人文会で唯一面識のあるみずす書房の田崎様に電話をして「当店で人文会フェアができないか検討して欲しい」旨を依頼しました。

するとその後すぐに田崎様の他に春秋社の片桐様、法政大学出版局の朝倉様の3名が当店にいらっしやいました。当初はフェア実施依頼の説明後お帰りになって検討されると思っておりましたが「場所は？」「期間は？」「展示できるアイテム数は？」など具体的な話をしているうちにその場でフェアを実施することが決まりました。あとは人文会が棚ごとのジャンルを決めてそのジャンルに沿ったアイテムのセレクトを行うこと、フェアのタイトルを決めて店内告知用ポスターなどのデータを作成することのみとなり、3名の方の即決力に驚くばかりでした。人文会は20社あるのですがこの後も代表の3名の方が統率力を発揮されて、お蔭様でフェアの開始前から開始後そして終了まで大変スムーズに進めることができました。その後人文会が棚ごとのジャンルの割り振りを哲学・思想3スパン、心理2スパン、宗教・教育1スパン、僅少本1スパン、日本史2スパン、世界史2スパン、社会2スパン、現代の批評・評論1スパン、その他(芸術・自

然科学など)1スパン、と決定して各出版社のアイテム選択に入りました。各出版社のアイテムと冊数が決まったところで搬入日と搬入方法をトーハンと打合せしました。出版社は出庫する商品をジャンルごとに箱に詰めてジャンル名を箱に貼り付けて搬入することになりました。後で考えると、多数の商品があるのでこの搬入方法がフェアをセッティングする際にジャンルの仕分けを不要にして効率がよかったと思います。またフェア中も補充品や新刊に必ずフェア用のジャンル名入り短冊が挟み込まれていたため、どのスタッフも間違えることなくそれぞれの棚に納品することができました。

フェア商品約100箱は3日間に分けて搬入になりました。フェア開始前日のセッティングの時は、台車と同じジャンル名の紙が貼られたダンボール箱ごとに棚前に運び、人文会約15名に商品を棚入れしていただきました。大人数でしたので実際の棚入れにかかった時間は2時間くらいでした。最後に棚上にジャンル名の入ったフェア名入り看板を取り付けて各階のエスカレーター周りに告知ポスターを掲出して無事フェアを立ち上げることができました。



また、フェアのチラシを作成していただき外商部の営業所に配布してもらいました。

フェアで苦勞したことは2つあります。

まずフェアで売れた商品の補充の方法です。

当店はレジが1階のみとなっており、フェアコーナーで売れた商品を抽出することができません。元フロアの

ることにいたしました。そこで2階に在庫のあった商品は元フロアの棚に戻す、ということも行ったのです。

次にフェアの陳列の見直しです。

フェア開始当初は1日当たりの売上が6万円強で推移しておりました。人文会とはフェアの売上金額は「科学と技術図書フェア」の400万円を目標にしております

棚とフェアコーナーの2ヶ所にそれぞれ在庫がある商品は1冊売れてもまだ在庫が1冊あるので自動発注にはなりません。また売れたのがどちらからなのかもわかりません。逆にフェアコーナーにしか在庫がない商品が売れて在庫が0冊になった場合には自動発注は出るのですが、元フロアの棚である4階や5階の補充品のダンボール箱に混載されて納品されてしまいます。そこで売上を1週間ごとに幹事様にお伝えして、売れたフェア銘柄商品は出版社から「2階フェア行き」と明記の上で補充す



筆者 近影

したので1日当たりの売上を6万円台後半まで持っていかなければなりませんでした。そこでフェア期間中売上が芳しくなかった「僅少本」のコーナーを撤去して売行良好書を面陳列したり色々工夫をいたしました。それが功を奏したのかわかりませんがその後休日や年末年始で売上を伸ばして、最終的には1日当たりの売上を6万8000円まで伸ばすことができました。

フェア商品の売上ベスト3は次のとおりです。

1位 みすず書房「夜と霧」

2位 紀伊国屋書店「へわたし」はどこにあるのか

ガザニガ脳科学講義」

3位 日本評論社「治さなくてよい認知症」

ジャンルでは思想・哲学・宗教と歴史が売上の7割以上を占めており社会・心理・教育などの社会系よりも人文系の商品の方が売上を作りやすいことがわかりました。また芸術や文芸といったどちらかといえば一般的なジャンルの売上が芳しくありませんでした。

客層としては心理などジャンルによっては20代女性もおり、4階と5階の人文書元コーナーとは異なる客層にもアピールすることができたと思います。商品単価も平均2200円で予想より高かったことに驚きました。やはりこれだけの商品が一同に並ぶと思わず財布の紐が緩んで値段の高い商品も購入してしまうという消費マインドなのでしょうか……。

今後は「年末年始は本の街 神保町で人文書」を年末恒例のブックフェアとして実施できるかどうか人文会に打診しようと思っております。

副田 陸児(そえだ りくじ)

人文会ニュース目次再録(101号～120号)

※執筆者肩書きは掲載当時のものです。

101号(07・6)

- 巻頭エッセー 炭鉱のカナリアとしてのツバル ジャーナリスト 神保哲生
一書店現場から一 田園書房本部 久保 誠
「伝えたい」という思い
15分で読む「こころの臨床学」
私の52年 後篇 京都大学大学院教育学研究科准教授・臨床心理士・文学博士 皆藤 章
元・八重洲ブックセンター常務取締役 清水軍三
私の選書論の試み 日本図書館協会理事 西野一夫
専門書の販売力強化のために 大学生協東京事業連合書籍事業部課長 射場敏明
研修旅行報告 広報委員会
人文会活動報告
人文会年次総会報告

102号(07・12)

- 巻頭エッセー 「人文」ということ 憲法研究者 樋口陽一
一書店現場から一 喜久屋書店倉敷店 市岡陽子
棚と対峙する日々
現代リベラリズムとは何であったか 東京女子大学人文社会科学系研究科教授・博士(社会学) 盛山和夫
「無料貸本屋」から「情報の町医者」へ 静岡市立御幸町図書館長 豊田高広
東京国際ブックフェアの変遷と展望 文化通信社 星野 渉
代表幹事あいさつ 春秋社 鎌内宣行
委員会活動方針
2007年特約店グループ訪問報告

103号(08・5)

- 巻頭エッセー アヤとコトワリ 編集工学研究所周長 松岡正剛
一書店現場から一 今井書店グループセンター店 家島聖司
人文書とフェア
15分で分かる日本中世史 東京大学史料編纂所准教授・文学博士 本郷和人
図書館栄えて出版減ぶ? 国立国会図書館電子資料課長 柳与志夫
くまざわが専門書を取り組む理由
(株)カルチエ・イクタ取締役役員アカデミア港北店店長 西原宗佳
研修旅行報告

104号(08・9)

- 代表幹事より 人文会創立40周年に向けて 鎌内宣行
エッセー 「よいこと」を決めるのは誰だ 東京大学大学院准教授 本田由紀
一書店現場から一 平安堂長野店 小峰果林
人文書と親書
15分で読む「社会福祉の研究課題」 昭和女子大学大学院社会福祉研究専攻教授 秋山智久
各委員会から
特約店グループ訪問報告
人文会活動報告・年次総会報告

105号 (09・5) 創立40周年記念東京合同研修会特集号

人文会創立40周年記念東京合同研修会について 代表幹事 鎌内宣行

特別講演 教養主義の没落と人文・社会科学 関西大学文学部教授 竹内 洋

第一部 パネルディスカッション 人文会の40年と人文書の可能性
ジュンク堂書店大阪本店 菊嶋 聡

筑摩書房 橋元博樹

東京大学出版会 持谷寿夫

司会 みずす書房

第二部 ケーススタディ 人文書販売の現在と未来

紀伊國屋書店新宿本店 吉田敏恵

大垣書店鳥丸三桑店 池田忠夫

喜久屋書店倉敷店 市岡陽子

あゆみBOOKS専務取締役 鈴木孝信

司会 春秋社 鎌内宣行

第三部 パネルディスカッション 人文書の最前線

月曜社取締役 小林 浩

平凡社編集部 飯野勝己

筑摩書房編集部 磯知七美

東京大学出版会編集部 山田秀樹

司会 勁草書房 吉武 創

創元社 華園 斉

みずす書房 田崎洋幸

106号 (09・9)

代表幹事あいさつ

一書店現場から

京都の街から

15分で読む経済思想

本を選ぶときのポイント

千代田区立千代田図書館 企画チーフ 河合郁子

ジュンク堂書店松山店 鳥羽隼弥

明治学院大学社会学部教授 稲葉振一郎

鎌内宣行

人文会活動報告

人文会年次総会報告

委員会活動方針

特約店グループ訪問報告

107号 (10・2)

一書店現場から

「教授の本棚」コーナーができるまで 萬屋書店熊本三年坂店店長 上田雅三

十五分で読む日本近代史入門講義 東京大学大学院人文社会科学系研究科教授 加藤陽子

大学図書館における新たな選書の試み 武庫川女子大学附属図書館司書 川崎安子

研修旅行報告

研究報告

108号 (10・5) 人文会連続セミナーin千代田図書館特集号

本を選ぶときのポイント 出版社を知り出版社で選ぶ

1 『国史大辞典』物語——日本史への道案内 吉川弘文館代表取締役社長 前田求恭

2 企画から出版まで——編集歴33年の経験から 未来社代表取締役社長 西谷能英

3 20世紀の思想を切り取る——ちくま学芸文庫 筑摩書房代表取締役専務・編集局長 熊沢敏之

4 最後の〈紙〉の百科『世界大百科事典』 平凡社執行役員 関口秀紀

5 福沢、南原、丸山と大学出版の未来 東京大学出版会常務理事・編集局長 竹中英俊

6 『夜と霧』生きがいについて」ロングセラーの誕生——シロナカイ出版 社めざすもの みずす書房代表取締役社長 持谷寿夫

7 番外編 私がすすめるこの一冊——本作りのプロに訊く、本の出会い

セミナー講師6名 & 千代田図書館館長 新谷迪子

109号(10・9)

代表幹事挨拶

―書店現場から―

―新店開店に際して―

15分で読むトラウマ・マップ

人文会活動報告

人文会年次総会報告

委員会活動方針

特約店グループ訪問報告

田崎洋幸

戸田書店静岡本店人文書担当

藤浪哲也

―橋田大学大学院社会学研究科教授―

宮地尚子

112号(12・4)

―書店現場から―

代官山の記憶―街に本屋は生まれ育つ

15分で読むイギリス

ばってん としょかん (Toshokan tsukokan)

2011年研修旅行報告

くまもと森都心プラザ図書館館長

代官山篤屋書店 薬師寺紋子

中央大学法学部教授 新井潤美

田中榮博

113号(12・9)

代表幹事挨拶

―書店現場から―

人文書担当としての試み200112012 (へんぶんやんへんぶんだぎ)

そしてMD制度導入のこと

15分で読む大正百年

公共図書館のデイストピア、その傾向と対策

人文会活動報告

人文会年次総会報告

委員会活動方針

2012年特約店グループ訪問報告

INTERVIEW 紀伊國屋書店 吉田敏恵

政治学者 尾原宏之

大阪樟蔭女子大学文学部国文学科教授 歌野 博

田崎洋幸

110号(11・6)

―書店現場から―

ベストセラーと基本図書

15分で読む歴史ドラマの背景

NHK大河ドラマと戦国史研究の進展

2010年研修旅行報告

リプロ商品部 野上由人

静岡大学名誉教授 小和田哲男

111号(11・10)

代表幹事挨拶

―書店現場から―

東日本大震災からの復帰とその道のり

人文会活動報告

人文会年次総会報告

委員会活動方針

人文会・紀伊國屋書店合同研修会報告

田崎洋幸

紀伊國屋書店仙台店店長

後藤 崇

114号(13・1)

―書店現場から―

「老舗書店」の矜持とチャレンジ

15分で読むイタリヤ現代思想

公立図書館における人文書の配架についての一考察

2012年研修旅行報告

L (Librarian) & (Publisher) の会世話人

長崎書店 長崎健一

京都大学大学院教授 岡田温司

吉野友博

115号 (13・4)

一書店現場から

くまざわ書店チェーン本部に聞く

INTERVIEW

くまざわ書店 森岡葉子 栗原真未
宗教情報センター研究員 葛西賢太

十五分でわかる仏教心理学
ブックツリーズムを通して図書館を核としたまちづくりを考える

松本大学松商短期大学部 常盤大学非常勤講師 内野安彦

一変化の中にある出版流通

トーハンの取り組み

株式会社トーハン 前仕入企画部シニアマネジャー兼
仕入企画部マネジャー(専門書担当) 倉根智男

日販が取り組む出版流通改革について

日本出版販売株式会社書籍部書籍仕入第二課長 駒村一雄

116号 (13・10)

代表幹事挨拶

一書店現場から

取次販売会社との販売契約について そして、あゆみBooksの人文書
販売の考え方について

寄稿・INTERVIEW あゆみBooks代表取締役社長 鈴木孝信

一編集者が語るこの叢書・このシリーズ

①白水iクランシックスは「異端」で「不評判」? 白水社編集部 竹園公一朗

②人文書と平凡社ライブラリー 平凡社編集一部 保科孝夫

東京女子大学図書館における学習支援の取組と丸山眞明文庫

東京女子大学教育研究支援部図書館課長 橋本春美

人文会活動報告

人文会年次総会報告

委員会活動方針

2013年特約店グループ訪問報告

人文会会長退任のご挨拶

菊池明郎

117号 (14・2) 創立45周年記念特集号

代表幹事挨拶

一人文会45周年記念シンポジウム

第一部 講演会 町と書店と人と——神保町で人文書売る

第二部 パネルディスカッション

人文書をどう売り伸ばすか?——私の取り組み

あゆみBOOKS 小石川店店長 伊藤 稔

ジュンク堂書店池袋本店 森 暁子

コーディネーター 東京大学出版会 橋元博樹

一人文会45周年記念特別寄稿 「35歳の主張」から10年

人文書の棚作り

「人文書棚」をつくるということ

MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店 澤樹伸也

リプロ池袋本店 松下康子

岩波書店販売部 宮下美紀子

往來堂書店店長 笈入建志

文脈棚と人文書 瀬尾俊二

紆余曲折の日々に学ぶこと 図書館流通センター仕入部

一「人文会」は私を育ててくれた場だった

2013年研修旅行報告

菊池明郎

118号 (14・8)

代表幹事挨拶

一書店現場から

人文書販売の現状とこれからの方策案

株式会社リプロ西日本運営部次長 野上由人

一東日本大震災から3年——今、東北の書店では

①3年を経たなお感ずる本の力

②商いとしての本屋

③オール浜通りで立ち向かう

さわや書店フェザン店 松本大介

ブックス・ミヤギ 細川早苗

鹿島ブックセンター 鈴木順子

田崎洋幸

田崎洋幸

十五分でわかる第一次世界大戦

『はだしのゲン』から「図書館の自由」をとらえ直す

慶應義塾大学法学部教授 片岡杜秀
慶應義塾大学文学部教授 糸賀雅児

―編集者が語るこの叢書・このシリーズ③―

不在の大学、ウニベルシタス

法政大学出版局 編集部 郷岡雅俊

人文会活動報告

委員会活動方針

2014年特約店グループ訪問報告

120号(15・4)

―書店現場から―
ちくさ正文館という本屋

ちくさ正文館書店店長 古田一晴

―15分で読む戦後七〇年―

体験的読書案内―世界の戦後七〇年に際して

大阪府立大学教授 細見和之

―図書館レポート―

図書館にとって専門書とはなにか?―知の再生産を維持・拡大するために

パネリスト

筑波大学附属図書館副館長 加藤信哉

慶應義塾大学メディアセンター所長 田村俊作

有斐閣代表取締役社長 江草貞治

みすず書房代表取締役社長 持谷寿夫

司会

―編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑤―

晶文社の「まるごとヨシモト」

『日本隆明全集』編集者 間宮幹彦

―研修会イベント報告―

年末年始は本の街 神保町で人文書

三省堂書店神保町本店店長 副田陸児

人文会ニュース目次再録(101号〜120号)

119号(14・12)

―書店現場から―
根をもつことと翼をもつこと

東京大学生協駒場書籍部店長 辻谷寛太郎

―15分で読む―

現代民主政治の危機と「言葉のお守りの使用法」

高千穂大学経営学部准教授 五野井郁夫

―図書館レポート―

図書館に人文書を販売する試み―最初の一年を振り返って

株式会社図書館流通センター 仕入部 松村幹彦

―編集者が語るこの叢書・このシリーズ④―

秘められた叢知―「井筒俊彦全集」を読む

批評家「三田文学」編集長 若松英輔

2014年研修旅行報告

2014年特約店グループ訪問報告

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷5-32-21 みすず書房内

2015年4月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	西浩孝	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
柏書房(休会中)		113-0033	文京区本郷2-15-13 お茶の水ウィングビル9F	3830-1891	3830-5337
紀伊國屋書店	三橋直也	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子智	108-8346	港区三田2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁草書房	西野浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	片桐幹夫	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	島田孝久	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	新保卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森卓巳	101-0064	千代田区猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口大介	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑摩書房	小島秀人	111-8755	台東区藏前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元博樹	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	江波戸茂	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	清田康晃	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	朝倉哲哉	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上無久	607-8494	京都市山科区 日ノ岡堤谷町1	075- 581-0296	075- 581-0589
未來社	水谷幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	片山伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事	田崎洋幸	2014.5より青土社新規入会
会計幹事	平石修	2014.5より柏書房休会
書記幹事	新保卓夫	
	《◎委員長(幹事) ○副委員長》	
販売・企画委員会	◎片桐幹夫 ○朝倉哲哉・三橋直也・三上無久・江波戸茂・水口大介・森卓巳	
調査・研修委員会	◎橋元博樹 ○片山伸治・西野浩文・小島秀人・清田康晃	
広報委員会	◎水谷幹夫 ○乙子智・岩野忠昭・西浩孝・島田孝久	

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com>

(新刊情報/各社へのリンクはこちらからどうぞ)

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。図書館におけるさらなる蔵書の充実のためにぜひご利用下さい。

●人文図書目録刊行会発行 A5判・平均245頁 頒価本体(各)286円



◆哲学・思想図書総目録2015-2016年版

約2,200点(134社) 収載。

[掲載分野]

哲学・思想一般/倫理学・人生論/美学/各国哲学/
現代哲学/宗教一般/宗教学 ほか

ISBN 978-4-915268-31-1



◆心理図書総目録2015-2016年版

約3,200点(116社) 収載。

[掲載分野]

心理総論/基礎心理/発達心理/教育心理/臨床心理/
精神分析/精神医学/社会心理 ほか

ISBN 978-4-915268-32-8



◆社会図書総目録2015-2016年版

約2,800点(138社) 収載。

[掲載分野]

社会一般/家族社会/地域社会/産業労働/福祉教育/
社会心理/社会問題/文化文明論/文化人類学 ほか

ISBN 978-4-915268-33-5

*ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21(みすず書房内)

<http://www.jinbunkai.com/>

●人文図書目録刊行会

〒162-8710 東京都新宿区東五軒町6-24(トーハンビル内)

TEL 03-3266-9521(事務局)

エイドリアン・レイン 著
高橋 洋 訳

何・が・彼ら・を・人・殺・し・に・さ・せ・た・の・か
脳科学や遺伝学を駆使し、いかに暴力的な性格が形成されるかを徹底的に分析する。タブーに斬り込む画期的研究の全貌を第一人者が解説。▼3500円+税

暴力の解剖学

神経犯罪学への招待

紀伊國屋書店

出版部:東京都目黒区下目黒3-7-10
営業TEL03(6910)0519
<http://www.kinokuniya.co.jp/>

国家、民族、植民地主義を
徹底的に批判する

抵抗と絶望

植民地朝鮮の記憶を問う

金哲(キム チョル) 著

田島哲夫訳 現代韓国を代表する文学研究者・金哲の日本での初の単著。日本の植民地支配期から「解放」前後、そして今日にいたるまでの韓国社会の姿を「民族」という概念を軸に見通し、植民地主義の構造を鋭く抉る。解説=沈熙燦・磯前順一。《推薦》柄谷行人・朴裕河 46判・2800円

東京文京 大月書店 電話03-
本郷2-11 3813-4651
www.otsukishoten.co.jp 税別価格

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp/>

ジャーナリズムは 甦るか

池上彰・大石裕・片山杜秀・駒村圭吾・山腰修三著 日本のジャーナリズムの問題点を徹底討論! 原発報道から歴史認識問題まで、メディア、ジャーナリズムの現状と将来を考える。◎1,200円

破断の時代

—20世紀の文化と社会

エリック・ホブズボーム著/木畑洋一・後藤春美・菅靖子・原田真見訳 資本主義社会の矛盾に鋭い眼を向け、社会変革の可能性を生涯追い続けたホブズボームは、最期、私たちに、いかなる言葉を遺したのか。 ◎4,500円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税抜】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

君たちに伝えたい

神奈川の裁判

小森田秋夫 編

神奈川県では全国的にも有名な裁判がいくつかあります。その中から8つの事件を選び、事件の背景、裁判の経過と結果、裁判の意義などについてコンパクトに解説。

■本体900円+税

ジモトを歩く

—身近な世界のエスノグラフィー—

川端浩平 著

〈ジモト〉はどこに消えたのか。アメリカ、オーストラリアで生活してきた著者が長らく離れていた故郷を歩く。『夢』をみることのできる地域社会の条件について考える。

■本体2,800円+税

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
TEL.03-5684-0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

ヒトはなぜ笑うのか ユーモアが存在する理由

MMハーレー・DCCテネット・RBアダムズJr / 本体3500円十税

片岡宏仁 監訳 どうしてヒトは笑うんだろう？ 笑いはなんの役に立っているんだろう？ 進化論と認知科学を武器に、この問いに挑む。

恐怖の法則 予防原則を超えて

キヤス・サンステイン / 角松生史・内野美穂 監訳 本体3300円十税

病原菌、有毒化学物質、テロリズム……政府はいかにして民衆の恐怖や不安に応じるべきか。

社会の構成

アンソニー・ギデンズ / 門田健一 監訳 本体6000円十税

客観主義と主観主義の二元論を構造化理論によって乗り越え、社会学理論を再構築する。ギデンズの理論的王者。

日本の『街場の憂国会議』に続く緊急論考集第一弾！

日本の反知性主義 内田樹編

赤坂真理 小田嶋隆 白井聡

想田和弘 高橋源一郎 仲野徹

名越康文 平川克美 鷲田清一

日本の言論状況、民主主義の危機を憂う、気鋭の論客たちによるラディカルな分析。1600円税別

日本の反知性主義

内田樹編

赤坂真理 小田嶋隆 白井聡 想田和弘 高橋源一郎 仲野徹 名越康文 平川克美 鷲田清一

Asi-facilitation in Japanese Society

〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11
品文社 Tel.03-3518-4940
http://www.shobunsha.co.jp

TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
http://www.keisoshobo.co.jp

心理学叢書

本当のかしこさとは何か

感情知性 (EI) を育む心理学
日本心理学会監修 / 箱田裕司・遠藤利彦編
他人と交わるなかで、私たちはさまざまな感情を経験する。自他の感情を把握、対応する能力である感情知性(EI)をいかに伸ばすか？具体的な取り組みを紹介。 2000円

無縁社会のゆくえ

人々の絆はなぜなくなるの？
日本心理学会監修 / 高木 修・竹村和久編
少子化、未婚率と単身世帯の増加、高齢者の心理などをデータで示しつつ、社会で急速に広がっている「無縁」の問題を分かりやすく解説した話題の書。 2000円

なつかしさの心理学

思い出と感情
日本心理学会監修 / 楠見 孝編 過去がいつの間にか美化されているのはなぜ？なつかしさという不思議な感情について、認知、記憶、感情、社会、臨床などの分野のオリジナルな研究に基づいて解説。 1700円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666 (税別)

松岡正剛

● 34刷出来！ ●

17歳のための世界と日本の見方

—— セイゴオ先生の人間文化講義
扉を開いたあなたへの一冊。セイゴオ先生による面白くてためになる歴史と文化の講義。世代をこえて読み継がれ10年！ 1700円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
TEL 03-3255-9611 (価格税別)
http://www.shunjusha.co.jp/

重版出来! 3刷

暴力の人類史

上・下 S・ピンカー

先史時代から現代にいたるまでの人類の歴史を通観しながら、多様なアプロチで、暴力をめぐる人間の本性を精細に分析

各42000円

氷河期以後

上・下 S・ミズン

氷にさらされた過酷な環境のなかで、人類はいかに生き延び、なぜ文明を発展させることができたのか。認知考古学の大家が挑む

各45000円

人はみな妄想する

松本卓也

國分功一郎氏、千葉雅也氏がいまも注目を集める気鋭の精神医学者が、ジャック・ラカンの思想の核心に迫る。

32000円

青土社

東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidousha.co.jp/ (価格税抜)

人類は、なぜ首を狩りたがるのか?!

首狩の 宗教民族学

山田仁史

かつて多くの民族に首狩の文化が存在した。フィールドワーク、豊富な文献資料を用いて、その実際と精神史的背景を考察する世界初の研究書。

● 本体30000円+税

筑摩書房

サービスセンター 048-651-0053

*価格は定価(本体価格+税)

http://www.chikumashobo.co.jp/

創元社

アカデミア叢書

大学と社会貢献

学生ボランティア活動の教育的意義
木村佐枝子 著/A5判・上製・240頁
定価(本体3,600円+税)

スポーツと心理臨床

アスリートのところから
鈴木 壯 著/A5判・上製・184頁
定価(本体3,000円+税)

心理療法としての風景構成法

その基礎に選る
古川裕之 著/A5判・上製・248頁
定価(本体3,200円+税)

現実的なものの歓待

分析的経験のためのパッサージュ
春木奈美子 著/A5判・上製・232頁
定価(本体3,200円+税)

〈本社〉大阪市中央区淡路町4-3-6
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
〈支店〉東京都新宿区神楽坂4-3 Tel.03-3269-1051
http://www.sogensha.co.jp/

歴史の「常識」をよむ

歴史科学協議会編 日本列島の原始・古代から現代までの歴史の「通説」を、歴史学研究の側から再点検し、学問の最先端としての最新の歴史像を提示する。

28000円

まなざしのレッスン

② 西洋近代絵画

三浦 篤 好評を博した『まなざしのレッスン』① 西洋伝統絵画』の続篇。難解な近代絵画を解きほぐし、美術館に行くのが楽しくなるテキスト。

27000円

東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
http://www.utp.or.jp/ (価格税別)

中学生の質問箱シリーズ

在日朝鮮人ってどんなひと？

戦争するってどんなこと？

生まれてくるってどんなこと？

日本のエネルギー、
これからどうすればいいの？

●小出裕章著 本体1200円＋税

●川松泰美著 本体1400円＋税

●C・ダグラス・ラミス著 本体1400円＋税

●徐京植著 本体1400円＋税

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
Tel:03-3230-6574
Fax:03-3230-6588
<http://www.heibonsha.co.jp/> 平凡社

日本評論社

刊行開始!

岡本達明「著」

水俣病の民衆史

〔全八巻〕

水俣病激発村を
徹底研究／初め
て書かれた闘争
の全体像／未公
開の第一級資料
を多数収録

第一巻 前の時代 本体6000円
第二巻 奇病時代 本体8500円
第三巻 闘争時代(上) 五月刊
第四巻 闘争時代(下) 六月刊
第五巻 補償金時代 七月刊
第六巻 村の終わり 八月刊

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL:03-3987-8621 <http://www.nippyo.co.jp/>

サルトル読本

哲学者としてのみならず、作家や行動する知識人
として多方面に活動したサルトルの全体像に迫る。
A5判・並製◇430頁◇本体3600円＋税

澤田直編

フラグメンテ

日本の現代思想研究をリードする著者初の論集。
思想史の迷宮に切り込む三十篇の断片を集成する。
四六判・上製◇680頁◇本体5000円＋税

合田正人著

法政大学出版局

東京都千代田区九段北3-2-3 ※価格は税別
☎ 03(5214)5540 <http://www.h-up.com/>

2015年4月30日発行 年3回発行 第120号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

シヤルリエブド事件を考える
〔ふらんす特別編集〕 本体価格925円＋税
鹿島茂、関口涼子、堀茂樹編著
約30名の識者による緊急レポート！
朝日・毎日・読売各紙で紹介、大反響3刷。

シヨツピングモールの法哲学
―市場、共同体、そして徳―
谷口功一著 郊外的公共性とは何か？ 規範理論を用
いて〈郊外〉の実像に迫る。 本体価格1900円＋税

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/>

〈非売品〉